

下総龍角寺の天台僧心慶

高 橋 秀 栄

鎌倉後期の永仁年間から南北朝時代の建武年間の頃、下総国埴生庄の龍角寺に良達房心慶（「しんけい」または「しんきょう」と発音する）という天台宗の学僧がいた。仏門に入った直後の一時期、『愛染王』の書物などを書写しながら、真言宗の密教を少し学んだようであるが、志してその奥義を究めんと一途に励んだものは天台学であつたらしい。現在、称名寺から寄託を受けて金沢文庫に保管されている心慶手沢本（自筆・他筆をふくむ）を通覧するに、『摩訶止観』『法華玄義』『法華文句』（『法華三大部』とも総称する）などの天台学の根本聖典をはじめ、日中両国の天台学に関するさまざまな書物を書写し、勉学に充てていたことが確認できる。中でも『摩訶止観』の本文の解説に専心傾倒する気持ちが強かつたよう

元・日蓮・一遍らによる新しい信仰運動の時代ではあつたものの、天台・真言（顯教・密教）両宗の教学研究が依然として盛んであつたことから、天台学の基礎学とみなされていて『俱舍論頌疏』に関する注釈書、あるいは参学の師匠から秘かに伝授された宗要の秘決や口伝に関する書物なども数多く残している。したがつてそれらの手沢本に書き止められた本文を子細に読み味わうならば恵心・檀那両流の中古天台学の諸相も漸次解明につながるものと期待されるところである。たとえば、心慶が知人から受け取つた消息の紙背に、「俊□法印・臨終略記事」と題して、

慈練和尚者、本ハ唯「宗之人也、雖尔、其後值範源法印習天台法給ト云々、法印初ニ付テ如「 」簡所願□者已満足ノ文ニ、一切衆生皆本来本覺之仏ナル旨ヲ談申給了、其時、和尚隨喜感嘆メ曰ク、山家ノ法門モ不可勝之云々、仍障子之内ヨリ白綾ノ衾ノ錦百兩許入タルヲ取出テ、法印ノ「前」ニ「 」然給ケリト云々、

其後ニ此法門ヲハ名百両法門一ト也云々、又其後ニハ対テモ俊範ニ慈珍和尚ハ少々習法門・給ケリト云々、仍テ俊範欲亡ト両眼。之時、訪諸医師ニ給等也云々

（『金沢文庫古文書』一九五四号紙背文書）

というような珍しい文章なども見いだされる。中世における「山家ノ法門」を学ぶ上において、心慶の残した天台学の書物は大いに注目されてよいであろう。しかし、残念ながら、管見するところ、心慶手沢本に取り組んで中古天台学に光をあてようと志す学究者は、極めて少なく、そのために、龍角寺から生まれた鎌倉時代の天台学僧・心慶の行状や学問業績がいまひとつ注目されない結果になっているのである。

私は以前にこの心慶の残した手沢本に興味を抱き、一二三の資料の本文を紹介したことがあるが、手沢本の本文が異体字や当て字を混えた行・草の書体で筆記された写本であるために解読にひどく手間取ったこと、また心慶自身の独特的な崩し文字に不慣れなこともあって多くの誤読を犯した経験があり、もっと心慶の書き文字がすらすら読めるようになるまで、解読作業は中断しようと心に決めて今日まで過ごしてきた。しかしながら、思い出多い写本資料をいつまでも投げ出しておくわけにもいかず、昨年の春から心機一転、心慶手沢本との触れ合いも持ち、座右に備えた『崩し字字典』を使りに、一文字一文字、丹念に読み出している。そうした困難な

作業の途上で、従来に知られざる要文記事にも数多く出会ひ、中古天台の学習に励みになる珍しい文献の数々であることもわかりかけてきた。そこで今後は機会あるごとに、心慶手沢本の価値を紹介する心づもりで、本文を少しずつ解説解きながら、龍角寺出身の天台学僧・心慶の勉学ぶりを発掘していきたいと思う。

そこでまず今回は、『内証仏法相承血脉等私見聞』という外題の手沢本の内容を紹介したいと思う。本書は、その書名が示すように、伝教大師最澄の著作である『内証仏法相承血脉譜』の本文注釈を中心に、その他の中古天台の碩学らの小さな著作類に対する注釈を収録した内容のものである。したがって、惠心・檀那両流の碩学の人名も数多く記述されているし、種々の口伝の秘決のような記事も随所にみられ、興味が尽きない。所々に虫食いに侵されているが、本文は首尾完全に揃つており、学術的資料価値は高いと思われる。ただ惜しむらくなれば、筆者自身、いまだ行書と草書の入り交じった心慶の筆跡を完全にマスターしているとは断言できず、なおも誤読を犯している箇所があるかも知れないということを危惧する。この点は識者の忌憚のない御教示を切にお願いしたいと思う。

さて心慶が縁をもつた埴生庄の龍角寺は、現在の千葉県印旛郡栄町に所在する天台宗の古刹である。吉川弘文館の『国史大辞典』によれば、和銅二年（七〇九）竜女によつて建立さ

れ、はじめ竜閣寺とよばれたという。本尊は銅造の薬師如来座像である。奈良前期の作と伝える頭部が重文に指定されている。また境内に存する塔心礎から「法起寺式」伽藍配置の寺院であったことも判明しているし、また平安末期か鎌倉初期と推定される経筒が出土しているという。そして、十二世纪前半には千葉常秀・秀胤父子の外護を得ていたという。こえて永仁四年（一二九六）頃には、関東天台の「談義処」の一つとして栄え、出雲路朗鏗・朗海の師弟や心慶らの学僧が居住していたという。その記述を裏付けるように、金沢文庫には、朗鏗の手沢本の一つで、「永仁四年十一月三日始之」の奥書を残す『法華文句私物第八』は、龍角寺に關わる資料としては最も古いものであり、かつ龍角寺がその当時、檀那流の流れを汲む関東天台（「田舎天台」ともいう）の「談義処」であつたことを示す一つの証拠ともなっている。また延慶二年頃には、その寺内に「学頭坊」「向坊」「筑前阿闍梨坊」と呼ばれる堂舎が建っていたことも判明している。また金沢文庫の第二代の当主・北条顯時が「霜月騒動」に連座し、弘安八年以後、十余年の間、龍角寺の存在する埴生庄に流摘していたという関係も見逃せない。

心慶の行状、伝歴に関してはわからないことが多いが、凝然の『声明源流記』に「良達房」という房号で記されているほどに能声（「声明を得意とした人」）でもあった。また道風流

の書風に親しんだ能書の人でもあった。しかし、天台学を修めることになつた經緯や天台宗という教団の中でどのような活動をくり広げたかということになると、我が国で編集された『高僧伝』には記されておらず、ためにその名はごく一部の研究者に知られる限りの「無名の学僧」「埋もれたる学僧」であるが、末尾に掲げた研究論文などから判明していることを箇条書きに示すと、おおよそつぎのようなことになる。

(1)下総埴生庄の談義所であつた龍角寺をはじめ、千葉寺の閻魔堂、さらには武州氷取沢の円宗寺などに居住してひとえに天台学を修めた田舎天台の学僧であつたこと

(2)出家後の一時期、密教を学んだらしく、密教の事相書を幾つか残していること

(3)天台学の根本聖典である『法華三大部』を深く学び、その修学成果を『三大部私見聞』という講義見聞録に結実させていること

(4)円暉の『俱舍論頌疏』は平安時代に円珍が将来して以来、仏教学の入門書として、近江の園城寺（通称三井寺）で盛んに学習、研究されたが、心慶もまた天台法門を学ぶ上での基礎学として『俱舍論頌疏』を学んでいること

(5)『十不二門指要抄』『止觀大意』『止觀義例』などの見聞録も残していること

(6)中古天台学の口伝法門にも関心を深め、『宗要集』関係資

料を書写していること

所収)

(7) 恵心・檀那両流の秘訣や口伝を一方に片寄ることなく公平に学ぶ態度の人であったが、恵心流の相生流や檀那流の毘沙門堂流の学習により強い関心があつたらしいこと

(8) 小野道風や藤原行成の行書・草書の書風を学んだ能書家であつたらしく、消息や手沢本にみる流麗な書体・筆跡には道風・行成様のおもむきが感じられること

(9) 声明を得意としたらしく、東大寺凝然の『声明源流記』に

「明忍房金沢長老 良達房 賢空房」と記され、また称名

寺で行われた「授与灌頂」の法要の際には、その能声ぶりを隨喜の僧衆の前で披露し、法要を一段と厳かなものにし

たらしいこと

などである。今回の資料紹介を通じても、以上のことことが再確認できるかと思う。因みに心慶の人物とその学問を知るために研究論文や参考文献には以下のようなものがある。

□ 稲慈弘「慧檀両流の関東伝播」（『日本仏教の開展と基調』

□ 大久保良順「慧檀両流に関する試論」（『大正大学紀要』四

八号所収）

□ 尾上寛仲「関東における中古天台—金沢文庫の資料を中

心とする檀那流について」（『金沢文庫研究』一〇〇号）

□ 恵谷隆戒「金沢文庫に現存する天台古逸書に就いて」（『日本仏教学協会年報』第七年）

□ 熊原政男「金沢の人々と下総のくに」（『金沢文庫研究紀要』第一号）

□ 小笠原長和「武州金沢称名寺と房総の諸寺」（『中世房総の政治と文化』所収）

□ 高橋秀栄「中世関東天台の成立と伝播について」（『曹洞宗研究員研究生研究紀要』第九号）

□ 高橋秀栄「心慶手沢本『(止觀) 輔行記序解私見聞』」（『金沢文庫研究紀要』第十号）

□ 川戸彰「古代・中世の竜角寺(一)」（『千葉県の歴史』5・6号）

凡例

一、漢字は組版の都合上、一部を除いて通用の字体に改めた。異体字による送り仮名も同様にした。

一、改行は原文通りとした。また文章頭部の鉤もその意味を尊んで表記通りとした。

一、虫損等による文字不明の箇所は□「　」とし、点や線から文字が推定できるものに限っては補入した。

取ノ名字者、聖教量ノ分齊ニテ取之云々

簡ノ名字者、冷煖自知ノ位ヨリ取之云々

御作十四帖ハ皇覺流ニ相承之ニ、余流ニ不伝之、皇覺流ノ人云也云々

御作者、乃至惠文・南岳ニテモ有之云々、可尋之、

内証仏法血脈等私見聞

師云、三井ノ惣体法門ハ依ル起信論等ニ也、又唐土ノ人師ニ了然ノ尺モ其意也、仍テ六十
局ニ往々ニ有ト其意ニ云々、十不二門ノ惣在一念別分色心ノ尺此意也云々、惣在一
念ハ惣体也、別分色心ハ別体也云々、惣ノ十不二門ノ尺皆然カ見ル也云々、了然ノ
尺意也、四明ハ了然ハ山外ノ師ノ義トテ破之云々

山門ヨリ難スルニ三井ノ義ヲエ不ル難シ落トサ也、山門ノ義ハ三井ニ惣体ト者、三諦
一諦、非三非一ノツホ也、何ソ云惣体ト哉ト難スル也ト云々

心慶

折紙血脈四帖事 舜海相伝ノ事 相應記ト云々 小巻物 相應御説

止觀一部八行頌事 小巻物 東陽 一心三觀口決事

内証仏法相承血脈事 小巻物 略本云々 三諦部相承秘決辻事 長巻物 伝教

小双紙 俊範ノ口決云々 円融三諦

宗要集辻事 小巻物 御廟 一心三觀ノ口決 フクソノ三諦 双非双照々々 本性々々等ノ

四種ノ三諦也 是未伝受

慈覚大師己心中記事 小卷物

是未伝受

一心三觀觀心査檢事 是未伝受_一 是ニ惠心旦那兩流ノ一心三觀事等有之

快豪徒リ実深ニ相伝スルヒサ門堂相承ノ秘書ノ隨一也

一心三觀血脉中 先中折ノ四血脉也

常寂光土第一義諦靈山淨土久遠實成多寶塔中釈迦牟尼者、

師云、是ハ内証仏法血脉相承之意也云々、仍テ其意如内証仏法血脉ノ口決_一云々

ム云、旦那流ノ一心三觀血脉口伝已下ニ此ノ三句事沙汰之_一、可見合也

師云、旦那流ノ血脉ノ次第与ト恵心流ノ次第_一異也、所謂、旦那流ニハ約ソ内証仏法相承ノ辺ニ血脉相承ノ次第ヲ存之_一、仍テ付テ此ノ三句ニ血脉相承スル也云々、故此三句事モ委細ニ沙汰之_一也云々

惠亮相伝中

文殊菩薩惠、阿難尊者定者、尋云、意如何、ム云、釈尊ノ一心ニ具足シ玉フ定惠_一

仍テ文殊ハ表シ惠_一ヲ、阿難ハ表スト定_一ヲ云事歟、若尔者、文殊ハ智惠ノ体ナル故ニ可云尔シ_一也
阿難何ソ云定ト_一哉、

師云、仏ノ一心ニ具足定惠_一ヲ給ヘリ、仍テ文殊阿難ト者、表定惠_一ヲ也、付之_一、阿難ヲ為ル定_一ト事ハ惣ノ声聞ヲハ福德莊嚴トシ、菩薩ヲ為ル智惠莊嚴_一ト、故ニ福德莊嚴ト者、定惠ノ中ニハ定ノ德也、故阿難ヲ為ル定_一ト等也、仍テ表ル仏ノ定惠_一ヲ義也云々

觀音菩薩空、藥王菩薩仮者、尋云、是又意如何、ム云、釈尊ノ一心ニ具足玉フ三諦_一ヲ
故觀音ハ表シ空_一ヲ、藥王ハ表仮_一ヲ、龍樹ハ表ル中_一ヲ意歟、若尔者、其意如何
藥王ハ以法藥_一ヲ與衆生_一ニ等ハ出仮利生ノ義也、故配ル仮_一ニ也云々、是師ノ義ノ徵也

觀音ヲ何ソ配当スル空ニ哉、又龍樹何ソ云中一ト哉、

師云、是ハ表三諦一ヲ也、觀音ト者、南岳也、藥王ト者、天台也、龍樹ノ中論ト者、惠文也、惠文ハ依テ龍樹ノ中論ニ得悟給故也、仍テ以テ惠文・南岳・天台一ヲ表ル釈尊ノ一心三諦ニ意也云々、付之尋云、藥王ハ以法藥一ヲ施与衆生ニ等ハ出仮利生ノ義ノ故ニ云仮一ト義爾也、惠文ハ依ル中論ニ故云中一ト歟、又觀音何ソ云空一ト哉、

師云、

相應相伝中

空 衆生法妙

惠文禪師 反 惠思禪師 仏法妙 者、意如何

中 心法妙

師云、惠文ハ於一心ニ空仮中ノ三諦ト得給ヘル等也、南岳ハ於法花ニ心仏衆生ノ

三法妙ト得給ヘリ、故ニ尔云也、天台ハ承テ此口伝ニ玄義・文句・止觀ノ三大部ヲ尺説給之時、約メ心仏衆生ノ三法妙ニ尺之給也、所謂玄義ヲハ約衆生法妙ニ、文句ヲハ約仏法妙ニ、止觀ヲハ約心法妙ニ也、是又空仮中ノ三諦也云々、其意三諦部ノ秘

決辻ニ図之、仍可見合之云々、ム云、秘決辻ノ下ノ見聞ニ書之、可見之、

半紙ノ脈譜者、ム云、惠文ハ付テ得ニ一心於空仮中一ト相承之給ニ作クリ半紙ノ脈譜ニ給也、南岳付得ニ三法妙一ト相承之、作一紙半紙ノ脈血ニ給等也云々、師義徵也、

ム云、此等ノ一紙半紙ノ血脉等可尋之

尋云、抑一心三觀伝於一言等事、如何

師云、付惠心流ニ惠亮相伝ト与相應相承、其ノ相承ノ語ハ少シ不同也、所謂

惠亮相承ニハ伝於一言ト者、一心ト云々、相應相承ニハ伝於一言ト者、

境智不二ノ一心ト云々、仍テ語ニ雖有ト多少ノ不同一、意ハ同事也云々

又云、於相應相承ニ遍豪ノ方ヘ相伝スルト惠心ノ方ヘ相伝スルト又其義別也ト云々
付之尋云、其不同如何

師云、

尋「云、世」間ノ人旦那流ニハ一心三觀ノ血脈相承無之云事有之、如何

師云、此ノ説僻事也、不ル知旦那流ノ血脈相承ニラ人如此云事也、仍テ旦那
相承之血脈相承ノ次第ハ尚遙ニ惠心流ノ相承ヨリモ甚深事共有之

□付テ伝於一言ト云ニ与惠心流ノ相承不同也、惠心流ニハ只約ノ所伝ノ

法門ニ相承ス之、所謂一心ト云々、旦那流相承ニハ一言ト者、一言記

也、所謂一言記トテ一言ヲ記シタル一局ノ書也、故云一言記ト也、此ノ一言
記ニ一心三觀等ノ口決有之、故此書ヲ師資相承スル也、仍テ旦那流ニハ此ノ

書ヲ相承スル也、惠心流ニハ不相承此ノ書ヲ也、仍テ不知一言記ト云事ヲ也、正ク

伝教大師值テ道遂和尚ニ相承之給ヘリ、故ニ云、和尚以慈悲ニ一心三觀ヲ

伝於一言ノ下ニ即相承此ノ書ヲ給也云々、ム云、是師義ノ徵記之、此ノ書祐師
不慮之外ニ感得之給ヘリ、可相承之、未許之、仍不相承之、以後

日可所望之、仍次年霜月於最後病席ニ蒙免許、於沒後□事了

師云、惣ノ付テ云ニ伝於一言ト異説不同也、所謂、惠亮相承ニハ

一言ト者、一心ト云々、相應相承ニハ境智不二ノ一心ト云々、旦那相承ニハ

一言記ト云々、如前ノ義

或云、一言ト者、一現也云々、所謂、釈尊一度世ニ出現ノ一心三觀ニ
ヒトタビ

説給相承ルニラ、故ニ云一現ト也云々、ム云、此義モ以

師義ノ徵ニ書之、但不得心ニ義也、可思之、又余ノ異説可尋之、

ム云、一現ト云事、旦那ノ一心三觀ノ血脉相承ノ中ニ沙汰之、可見之

□云、付テ惠心流ニ惠亮・相応ノ二ツノ相承不同ト云ヘリ、爾者、旦那流ニハ

惠亮・相応ノ相承之徵ヲハ不相承歟、若尔者、如何

ム云、旦那流ノ血脉トテ今相承セルニハ惠亮・相応ノ相承トハ不見ヘ也、仍テ

慈覺^{相亮}・慈叡・承誓・理仙・慈惠・覚運ト列タリ、故知ヌ惠

□・□応ノ相承ニハ非ル也、但此列ノ様ハ専レトモ慈恵大師ハ惠亮・

相応共ニ相承給ト見タリ、尔者、旦那ニモ相承之給ハシ事何ソ無之哉、

哉、若尔者、何ソ云ハシ惠亮・相応ノ相承ハ惠心流許ニ相承ト之哉、

□テ慈叡・承誓等列^{トラ}ヌルハ一途之徵ヲ図スルニモ有ランハ如何、可思之、

師云、

舜海相承中 相応記ト云々

尋云、相応ノ記ト云事如何、仍見ルニ今記之始終ヲ余人ノ記ト覚タリ、所以然者、云ヘリ則帰朝ノ授クト相応和尚ニ、若相応ノ自記ナラハ何云ハシ授ト相応和尚ニ哉、故不宜也、可尋之、

師云、相応和尚ノ受テ口伝ヲ余人記之歟、ム云、故云授ト相応和尚ニ歟、サテ以相応ノ口伝ヲ記之故ニ云相応ノ記トハ歟、

ム云、故云トモ相応ノ記一ト授相応和尚ト云マテト覚也、已下ハ次第相承人々^{ツク}々可書^{ツク}統自分ノ事ヲ故也、仍テ和尚以授遍豪已下ハ不可云

相応ノ記トハ事也云々、可思之、

□者說法不立文字者、止觀等ヲ說法給トモ無記録、故云不立文字ト也

〔章〕安大師記録之給故也云々

傳大士六世之孫者、以下ニ内証仏法相承ノ下ニ書之、可見之、

龍象遂公者、龍象ト者、惣テ智者・学匠・有徳ノ人ヲ云事也云々、仍今ハ道遂和尚ヲ如此云也云々

其ノ恩方ニ何、以テ財ヲ祇報セント三衣一鉢既空ナレ、以テ法ヲ祇報セント者、ム云、

如此可読歟、私ニ點之、師文点大旨此趣也

我レ汝チ並ニ非聖人者、師云、舜海非ルコトヲ其器ニ云也云々、ム云、

既ニ云我汝並一ト、故我身モ非其ノ師ノ位ニ、汝モ非スト其器ニ云ト覺也、可思之、

師示メ眼相ヲ敢以不言者、異本ニハ眼相ト云々、若示ト眠相ヲ云ニ本ナラハ眼ネムル相ヲ示スト可得心也、若示ト眠相ヲ云ニ本ナラハ眼ニ示メ不許ノ相ヲ不ル言等也

師有頓言者、異本ニハ項言ト云々、頓ノ字ナラハニワカニ有リト言コト可読也、項ノ

字ナラハ有テ項言ハクト可読歟ト覺也、可思之、

雪立断臂者、惠可參メ達磨ニ求法ヲ之時、雪中ニ立事七日歟、

尚不示法ヲ仍テ断テ臂ヲ投入ル、其時示法等事也云々、或本ニハ雪童ノ

志ト云ヘリ、是ハ雪山童子トソ為ニ半偈ノ其身ヲ施与ヘシ鬼ニ等ノ意也云々、サテ

雪立断臂ト云ヘルハ惠可和尚事也云々

我今無師トメ可授之法者、ム云、卑下ノ句ト覺也、我非レハ師位ニ無シト法トソ而授

云事也

所謂ル空ハ即畢竟不生者、ム云、所謂空即畢竟不生ヨリ

。但法ハ依テ人興也、人ハ依テ法ニ貴トシト云マテハ慈覚大

師ノ私記ニ伝教值テ道遂ニ以相承ノ旨ヲ授慈覚ニ給之時、如此

相承給ヘル所伝ノ法門ヲ書カレタリ、今ノ文全ニ其文也、以此所伝ノ法ヲ師資相承スル故ニ今又授此法門ヲ故ト覺也、仍テ非私ノ語ニ也、可信仰一事也、

雖在ト一心ニ其事猶別ナリ、。極位ノ普現色身其事各別ナリ者、

ム云、□□三諦在一心ニ事理相即スレトモ而尚不二ノ辺有ト之ニ云事也、相即スト云ハトテ
無ノ目モ鼻モ非スト無ニ而二ノ辺ニ云意也云々、仍テ冰水雖即一スト而冰水又殊ナル等也
近代ノ学徒失此ノ一節ヲ者、ム云、執メ不二ノ一边ヲ失スル而二ノ一边ヲ等也
仍テ而二辺ヲ皆属ル別教ニ等也云々、何ソ円教ニ無而二辺哉云々、可思之、

千論横ニ起者、如此僻事ヲ存ル故難問重々也、仍テ千万ノ諍論横ニ起ル等也

又執僻事ヲ故ニ他人ノ万難牢キ通シ等也

但言ニ相即以爲遮難ヲ者、ム云、以而二ノ辺ヲ難レハ之、但以不二相即ノ

意一ヲ一边ニ答ヘテ以テ爲レスト遮ニセント所難ニ云歟ト覺也、仍テ雖執ト相即一ヲ全ク不存
相即融通ノ旨一ヲ也、今家所立ノ円門ノ意ハ而二不一並テ鼻ニ一刹那モ不可

相離ニ法体也、何失一边ヲ哉、故ニ全ニ無ト相即融通之意ニ云也、故以邪ニ
顯正一ヲ何以可ト階云也、是則伝教・慈覺相承ノ旨也、不可聊尔一事

也、仍テ可信仰一事也

至テ天童龍ノ辺ニ者、付之尋云、天龍河ト者、如何

師云、付之異義不同也、一義云、遠江國ノ天龍河ノ事也云々、舜海本ト

遠江国人也、故学文ノ後、下国之時、於テ彼ノ河ノ辺ニ此法授ル等也云々

一義云、不爾、無動寺ノ閻伽井ノ水ノ流レノ末ヲ云天龍河ト也云々、所以然者、相応
和尚於ノ無動寺ニ勤行シ不動ノ法ニ給之時、天童現ソ小便ヲシ給テ、此小便ノ水
相応和尚ニ令飲給フ、仍テ其後身心聰明也云々、其小便ノ水閻伽井ノ水ト成ル

也、ム云、此事夢想歟、可尋之、仍テ天童ノ所生ノ水ナル故ニ名ル天龍河ト等ノ意也云々、故非遠江國ノ天龍
河ニハ也云々、付之重々委細事共有之、可習之、今大概ヲ記ル也

一義云、天龍河者、非此等体ノ事ニ、約ノ法門ニ云事也云々、其義如何、可習之、

ム云、此等事共可尋習之、此等事委細記錄セル物有之歟、

尋云、無動寺者、何之比誰人建立哉、

師云、相應和尚ノ建立也、相應和尚於彼靈地ニ多年不動ノ行法被勤行
依之種々ノ靈驗共有之云々、仍於彼ノ靈地ニ建立シ無動寺ヲ給等也
或時無動明王戴テ相應和尚ヲ「參都卒」ニ給ヘリ、欲スル入ト内院ニ

之時、守護天童ノ云々、此所ハ法花修行之処ニソ不法花修行一人ハ不參
處也、若欲ハ參ト此所ニ法花經ヲ奉テ読誦シ可參詣也ト云々、仍テ叡山ニ帰

住ソ奉テ值慈覺大師ニ始メテ習法花經ヲ給ケリ、無智人ニテ御ケル之間、頓ニ習難キ故

仮名法花經ヲ以テ習給ケリト云々、尔今相應和尚ノ仮名法花經トテ御ス也ト云々

ム云、如此雖無智無極人也ト、既ニ一心三觀血脉相承給フ事、何様ニモ有子細一事也、
可尋之、惣此等事共叡山ノ縁起等可見之、定有之歟、

其後書信ソ往復ソ者、ム云、血脉相承ノ書ヲ信仰ソ□□ソ頻ニ所望スル之
等也、仍テ不レソ勝ス其志ニ授之等也云々

一心三觀口決中 相應御說

覚全 相應御說者、尋云、覚全ト者、如何

師云、覚全ト云人稟テ相應ノ御說ヲ記之等也云々

尺ニ迹門ノ境妙ヲ立四諦・三諦・二諦・一諦ヲ者、ム云、是ハ玄義三ノ尺ル四諦ノ
境ヲ下ノ取テ意ヲ如此云也、非全文ニハ也、転日不転日等者、尺ル一諦ヲ

下ノ尺ノ意也、非全文

玄三云、六ニ明一諦ヲ者、大經云、所ノ云ニ二諦ハ其实ハ是一ナリ、方便ソ説ニト、如醉未

吐^一見日月転^一スト、謂有転日及不転日^一、醒^{サメ}タル人ハ但見不転^一不見於転^一ヲ々

二ヲ為龜不転ヲ為妙ト、三藏ハ全ク是転一ナリ、同彼ノ醉人ニ、諸大乘經ハ帶ノ転
二ヲ說不転ノ一ヲ、今經ハ正直ニ捨方便ヲ、但說無上道ノ不転ノ一実ヲ、是故
為妙云々

如ク是諸法真実ハ唯一諦ニ有リト尺スル也、是則迹門ノ意、本ト以相即ニ為宗ト者、
ム云、此義意ハ迹門ノ意ハ中道一実ノ相即ヲ為ル宗ト、故一實諦ヲ為真実ト
二諦三諦等ハ非ト真実ニ云也、故転日ヲ譬ヘ二諦三諦等ニ、不転日ヲ譬ル一實諦ニ等也
本門ノ意ハ不尔、諸法皆本来常住ニソ一法ゾモ無ト非ル真実ニ法云也云々、如此可得心歟、如何、
師云、

以此義辯常ノ人一實諦ハ真実也者、ム云、是ハ世間ノ人但偏ニ以迹門ノ意ヲ
本迹門ノ意モ不ソ分別ニ辯ニ云ニヲ一實諦ハ真実也、二諦三諦等ハ不可也ト非スルト
覺也、サテ而本門ノ正意ハ者、已下ハ我カ義ノ徵ヲ宣フト覺也、所謂本門ノ意ハ
諸法皆本来常住ニソ一法メモ不虛ニ云也、故此相伝ノ流ニハ一實諦ノ日モ可ト有空假ノ
理云也、何ソ二諦三諦等ヲ非スル哉ト云也、如此可得意歟、如何

師云、

付之尋云、今義ノ意ハ本迹二門俱ニ合ソ一實諦ノ日モ可ト有空假ノ理ニ云歟、ハタ
迹門ノ辯ヲハ同ソ常ノ人ノ義ニ於本門許リニ如此ニ云歟、

ム云、此義ハ俊範ノ相承ノ徵リト終ニ見タリ、尔者、迹門ノ辯ハ同シ常人ノ義ニ、付テ本
門許ニ如此ニ云義也、迹門ニハ說テ理常住ヲ不ト說事常住ヲニ云義ナル故也、可思之、
仍テ此皆惠心流ノ義徵也、仍テ旦那流ノ義ノ意如何、可習之、

師云、

從本已來冰性水性不失、俱本有常住ノ法故也者、付之尋云、迹門ノ

意ニハ如此云事不可有之歟、如何、ム云、此義意ナラハ迹門意ハ雖說本有常住ト皆入テ実相ノ一理ニ可説也、本門意ハ必モ不入実相ノ一理ニ、直ニ約ソ事々諸法ノ當体ニ如此可云也、仍テ今ハ約事法ノ当位ニ云ハハ本門ノ意ト可云也、此義微也、如何師云、

故円身法中論ノ三ニ云ク者、師云、已上、論ノ名也云々
以多ニヲ破一ヲ名テ為一相ト者、付之疑云、以一ヲ破ト多ニヲ可云歟ト覺也、仍書誤ル歟、如何、玄義ノ尺可見之

方便ヲ為究竟ト者、方便ト者、仏果ノ上ノ衆生利益ノ方便等也、利益衆生ノ方便究竟スル仏果円満ノ義也云々、可思之、余処尺可見之

止觀一部八行頌 東陽 中

師云、東陽座主忠尋、止觀一部ヲ八行ノ偈頌ニ結給也、是最極秘藏ナル故ニ心觀ニモ不相伝、只淨明一人ニ俊範法印被授ケリト
淨明法印被仰ケリト云々

五略皆解者、是ハ五略十廣之中ニ五略ノ意ヲ結也、所謂五略ハ皆妙解ノ分也ト云々、但信法性者、妙解ノ意ヲ結也、是又止觀ノ尺ノ意也云々、修行証果者、自是一途ノ機ヲ拏也、五

略ハ皆解了ノ分ニシテ雖無ト行証不ソ至十大章ノ廣尺ニ於五略ニ修行証果セシ、機ハ是非止觀一部ノ正機ニ、故是一途ノ機也云々、已上五略畢尺名体相者、已下ハ尺名体相ノ二章也、二章雖異ト其ノ意同キ故ニ合ソ拏之、絶待不思者、尺名ニハ雖尺ト相待絶待ヲ、以相待ヲ顯ス

絶待不思議ヲ也、故絶待不思議獨一法界也、絶ト者、絶待也、待ト者、

相待也、不思ト者、不思議ト云事也云々、サテ体相ノ下ニハ明テ次第不次第一ヲ以次

第ヲ顯ス不次第ヲ、故顯不思議獨一法界ヲ也、仍テ尺名体相ノ二章其意

大ニ同也、故合ソ挙之云々

摂法偏円者、摂法偏円ノ二章也、是又同ク是妙解ノ分也、仍テ合ソ

挙之、一途ハ同シ前ニ者、是猶妙解ノ分ナレトモ於テ期ニ修行証果セン

□是又自是一途ノ機也、其意同シト前ノ五略之中ノ一途ノ機ニ云事也云々

方便一章者、第六方便ノ章也、二十五法ト者、二十五方便也、戒体

具足ト者、二十五方便ノ中ノ第一ノ持戒清淨也、戒体具足ノ中ニ円頓戒可

有之、一心三觀ヲモテ明ラメヨ戒ノ持犯ヲ者、円頓戒ノ事也、一心

三觀ニ住スル之時ハ名持戒ト、一心三觀ニ不住之時ハ名犯戒ト等也、付之第六方便
章ハ或属シ妙解ニ或属ス妙行ニ、其中ニ以一心三觀ヲ明ヨト戒ノ持犯ヲ云ヘル是

即有リト妙行証拠ノ一ツ也云々、一心三觀ハ即妙行也、依之名字即之位ニモ分ニ

有ト行ニ云義以此等ノ尺ヲ可証ト等也、維仙ハ名字位ニ有ト行ニ被云ケリト云々
一心三觀明戒持犯ト者、尺ノ意也云々、惣ノ第六方便ノ章亘解行ニ事

止觀ノ大綱抄ニ書之、可見之

正修止觀者、第七正修止觀也、以心觀心者、前念為境、後念為

觀ノ意也、不立二法者、能觀所觀ヲ不立故也

双レトモ止觀ヲ以三十乘末ニラ具者、是又名字ニ有ル行証也云々、第七正修止觀ハ
觀行即ノ位也、雖尔ト十乘ノ觀不ル具足之間ヲハ猶属スト名字即ニ云事也、故名

□有行証也云々、抑十乘未具ト者、何様可云哉、十乘具ニ不スト修ニ云事歟

師云、不尔、上根唯一法等云故ニ上根ハ只十乘ノ中ノ第一ノ觀不思議境ノ一乗

許修ソ之ニ得悟ス、故不可用下ノ九乗ヲ也、故以十乘具ニ不ヲ修不可云十乘未具一トハ事也、所謂雖修スト一ツノ不思議觀ヲ觀法無間断修スルヲ名十乘具足一ト也、故觀法無間断修ル位ヲ名觀行即一ト也、十心具足初隨喜ト云是也、仍テ雖十

乘不スト具ニ修、於一乗ニ無間断修ル之時余ノ九乗ノ心皆具之、故云十乘具足一ト也十心具足初隨喜ト云モ如此ニ可得心也、必非皆具ニ修ルニ也、故今云十乘

未具一ト者、觀法有ルヲ間断云也、仍テ此位ヲハ猶属スト名字ノ位ニ云事也、觀法無ヨリ間断ニ可名觀行即一ト故也、故有間断位ヲハ初隨喜品ノ初心ノ位也、即

属スト名字即ニ云也云々、付之尋云、於テ修ルニ一乗ヲ具スト余ノ九乗ヲ云事何様可得心哉

師云、修觀不思議境ヲ之時、一心三觀明了ニ照ス邊ハ觀也、妄情分別

止息ノ寂靜ナル辺ハ止也、是則巧安止觀ノ義也、余例ソ之ニ可知也云々

ム云、大意ノ發心之時、既ニ發無作ノ四弘誓行ヲ其ノ上ニ修ス不思議觀ヲ、於テ一切衆生ニ不作損害等ヲ、是起慈悲心ノ意也、余例之ニ可知也云々

尋云、上根唯一法、中根ニ或七等ノ尺如何

師云、此尺ハサン定止觀ノ尺也、今ノ止觀ノ意ト異也、所謂、今摩訶止觀ノ意ハ

上根ハ第二ノ起慈悲心ニテ取之、中根ハ至ル第三巧安止觀ニ、下根ハ第四破

法遍ヨリ至第七ニ皆用之云々、後ノ三乘ハ非正キ觀法ノ体ニ相從ノ名十乘觀一ト

故也云々、故サン定止觀ノ尺ハ異尺也云々、下根方具十ノ尺不得心一事也

後ノ三ハ非正キ觀體ニ故也、ム云、可明之

尋云、サン定止觀ハ誰人ノ尺哉、師云、妙樂ノ尺也、一局ノ書也、宣ル止觀ノ意ヲ也

或止觀ノ大意トテ一局ノ書有之、妙樂尺也云々

或云、サン定止觀ハ非ス妙樂ノ尺ニ、智運法師ノ尺也ト云事有之、智運法師ト者、文句ノ末文ニ私度記ト云書作ル人也、譬喻品ノ疏マテ作之、十局也云々

尋云、十乘ト云事如何、乗ハ運載ノ義也、仍テ実相ノ理ニ運載スト云事歟
□云、乗ト者、約智ニ尺也、止七ニ引テ譬喻品又多僕從而侍衛之衛ノ文ヲ
□ス十乘ノ義ヲ、可見之云々、ム云、十乘事、大綱抄可見之

猶属名字者、師云、是又名字即ニ有ト行云証也云々、既ニ於第七正觀ニ

立ッ名字ノ名ヲ、故知ヌ名字ニ有ト行云事分明也、維仙ハ名字ニ有ト行云々、此等ノ意附合セリト云々

隨喜ノ初心者、五品之中ノ初隨喜品ノ初メノ初心ト云事也

一念法界ヲ名テ為行体一ト者、觀スル一念法界一ト是名ル行体一ト也云々

心地不生ハ非為^{スル}ニ行ト者、師云、心地不生ノ之時ハ十乘十境トモ不可立^一故云非為行也ト也、心地不生ト者、元意也、止觀ニハ附文、元意、心地不生章ウツリトテ有之、心地不生ト者、元意也、章ウツリト者、附文也

一念法界トモ觀ルハ附文章ウツリノ時ノ事也、元意ノ時ハ十乘十境トモ不可

立之、行トモ觀トモ不可云、故ニ云心地不生非為行也一ト也云々

師云、此八行ノ偈頌ハ最極秘事ナル故ニ心觀ニモ不伝之、只淨明一人相伝ト之云々、淨明如此被仰ケリト云々

又云、於名字ニ簡ノ名字、収ノ名字トテ不同有之、収ノ名字ト者、學解ノ分齊マテモ可取之云々、所謂、聖教量ノ分齊ヲ以テ知一切法皆是仏法ノ道理ヲ信知スル分齊マテモ取之也云々

簡ノ名字ト者、冷暖自知ノ位ヨリ取之、故是ハ勝也云々、今所ノ云名字ノ

解云是也云々

内証仏法相承血脉中

尋云、内証仏法相承ト云事如何、南岳ハ内証等覚無垢ノ大士觀音

也、天台ハ内証藥王菩薩等覚無垢ノ大士俱ニ靈山ノ聴衆也、仍テ親リ於靈
山ニ釈尊ニ相承給ヘリ、故云内証仏法相承血脉ト云歟、如何

師云、不可尓一事也、惣ソ今所云「血脉相承」ト云事ハ、南岳・天台ト被レ云
給フ、付テ垂迹之面ニ可沙汰内証仏法相承ノ義ヲ也、所謂、天台大師ハ於テ大
故付テ垂迹之面ニ可沙汰内証仏法相承ノ義ヲ也、所謂、天台大師ハ於テ大

蘇道場ニ二七日之曉^{アケホノ}ニ行道誦経シ給ニ、藥王品ノ是真精進是名真法供

養如來等ノ文ヲ誦シ給之時、豁然トメ三昧開発シ給、其時靈山一會現前

未散トテ、昔靈山会上ノ説法花之儀式歷々ト現前メ八万ノ大士万二

千ノ声聞乃至人天大会等一分モ不相違、仍親リ奉対釈尊ニ此法ヲ相

承給等也、是則聖師現前ソ伝法授戒等ノ云ヘル意也、其時以証ヲ白師ニ給

南岳ノ曰ク非汝ニ者不可証、非我ニ者不可知、是ハ々法花三昧ノ前方便ノタラ尼也云々
仍テ我モ既ニ如此事有キ之、其時五百ノ應身羅漢從リ釈尊ニ誂預リ置ク以書ヲ予ニ

授ク之、今汝既証悟ス、又此書ヲ可ト与フ汝ニ被テ仰彼ノ書ヲ授キ天台ニ給也云々

此事旦那流ノ一心三觀相承之時可沙汰之也云々、故此相承之徵リヲ

名ル内証仏法相承血脉ト也云々、所謂南岳モ天台モ於迹ノ面ニ如此内証

開発給テ直ニ從リ釈尊ニ相承給故也云々、仍テ非本地觀音藥王之時ノ事ニハ
也云々、仍テ本地沙汰ヲハ不可為一事也云々、故今内証仏法相承血脉ノ譜

云事ハ此ノ相承ノ名也、五箇ノ血脉雖有之、余ノ三ノ血脉ハ次テニ惣ノ伝教大師相承給ヘル血脉相承ヲ書列ネ給也、仍テ余三ノ血脉ハ非内証仏法相承ニハ也云々、此事大概依師ノ説ニ注之、能々可口伝之

ム云、五箇ノ血脉中ニ第二ノ天台法花宗相承ト第三ノ円教菩薩戒相承ハ共ニ内証仏法相承ニ可取之歟、ハタ菩薩戒相承ハ不可取之歟、如何

師云、共ニ可取之、三昧開発之時、聖師現前ノ受戒也云々、至下ニ可沙汰之我叡山伝法未有師々ノ譜者、付之尋云、若如此ナラハ一家

天台血脉相承無ヲ之、伝教初メテ造之給ト可得心歟、如何

師云、不可尔、惣ノ非云ニ無ト血脉相承、師々相承シ給ヘル血脉ヲ今聚ツメ書テ示シ一
家之後学ニ給ト云事也、以前ハ雖有ト血脉相承ニ未造譜脈ヲ不伝之故

云未有師々譜ト也、仍今叡山ノ大師類聚ノ造五箇ノ血脉ヲ給等也

是皆伝教大師以師資相承ノ口決ヲ造之給也、非胸憶ノ説ニ也云々

一達磨大師付法相承者、師云、伝教大師ハ兼受達磨ノ法トテ入唐之時

正ク習天台ヲ兼テ受ニテ習ラヒ達磨相承ノ宗門ノ法門ヲ給也、仍テ是ハ宗門相承ノ血脉
譜ノ徵リ也云々、於ハ日本ニ大安寺ニゾ行表和尚ニ宗門ノ法ヲモ相承給ヘリ、仍テ見ニ下ノ

血脉ヲ行表和尚之下ニ図ス之、惣ノ伝教大師十二御年ヨリ行表和尚ニ奉テ

付花ム・法相・宗門等ノ法ヲ学給也云々、弘法大師モ行表和尚ノ御弟子ニテ御也

仍伝教ト弘法同法ニテ御ス也云々、入唐モ同時也、雖尔ト伝教ハ先立テ帰朝給也

延暦廿三年ノ御入唐、同廿四年御帰朝也、桓武天皇ノ御宇也、其間ニ天台・真言・宗門等ノ法御相伝ト云々本ト天台ノ後身ニ御ス、故口伝相承無勞一事也云々、弘仁十三年二月十四日依勅成伝灯大法師

給也、同六月四日辰時御入滅ト云々

尋云、唐土ニテハ直ニ対ノ達磨和尚ニ相承シ宗門ヲ給歟、如何、若尔者、今

所ノ國一ル譜脈ヲ見ルニ達磨以後九代ニ日本國行表和尚ト云々、而者時代遙ニ遠シ、何ソ伝教直ニ相承シ達磨ニ給哉、如何

師云、非直ニ值達磨ニ給ニハ時代遙ニ相隔レリ、仍入唐之時、兼テ受達磨ノ法一ヲ給ト云事也云々、雖尔一ト今ノ相承ノ國ハ日本ニシテ從リ行表和尚ニ相承ノ次第也云々、ム云、唐

土ニシテ宗門相承ノ師可尋之、

尋云、伝教大師ハ本国何人御哉

師云、伝教ハ高麗國ノ人来ル日本國ニ、於日本國ニミクマノムラシト云姓ヲ給ト云々其後神明ニ子ヲ祈請ス光明赫々トノ母胎ニ入ト夢想ノ有テ伝教大師ヲ生奉ル等也地体此人儒者也、仍テ伝教十一マテハ文學シ給也、其後十二ニシテ行表和尚ノ御弟子ト成テ學仏法一ヲ給等也云々、委ハ如伝教ノ別伝ノ、可見之云々

師云、伝教本學シ天台宗一ヲ給事ハ奉值行表和尚ニ学シ花嚴一ヲ給之時、花嚴ノ法門之中ニ少々引天台ノ尺一ヲ見ニ之、此法門甚深殊勝也ト思食故ニ尋此書籍一ヲ給之処ニ〔マ〕唐照大寺ニ鑑真和尚天台ノ本書三十局渡之給ヘリ、其時ハ妙樂

未出世一給一故ニ末書未有之、故本書許也、伝教尋往照大寺へ披見

此書一ヲ給ニ本ト天台所説ノ法門ナル故無所滯、如此自見ニ覺給テ之後、渡唐テ值テ道遂和尚ニ口伝相承給ニ不可経時節一速疾ニ相承之給等也云々

又真言日本國ニ伝來スル事ハ伝教相承之真言最初也、弘法大師ハ同時入唐ナレトモ帰朝後也、故ニ東寺ノ真言ハ後也云々、仍テ伝教大師天台ト与真言一ト顯密兩

宗相承ノ帰朝給、其時桓武天皇ノ御宇也、招合テ六宗ノ學徒一ヲ宗論有之強者ノハ至ルトテ一二ニ一問一答ニ一問一答マテ也、其後ハ閉口云々、弱者ノハ閉口ニ不及一問一答ニモ□六宗ノ被成長者ニ、東大寺ニ本ト六宗有之、俱舍・成實・律・法相・三論・花ム也、伝教、天台ト真言ト顯密兩宗ヲ加給也、仍テ八宗

兼学ノ寺トハ東大寺ヲ云也、余寺ヲハ不可云八宗兼学一トハ也云々

又仰テ六宗ノ学徒ニ対テ最澄法師ニ可真言ノ灌頂受法也云々、仍テ高尾寺ニメ
六宗学徒皆灌頂スト云々、^(マ)嚴藏法師第一番ニ灌頂スト云々、是弘法大師ノ師匠

也、故ニ弘法ハ伝教ノ孫弟子ニ当リ給ト山法師ニ云也云々、又高野法師ハ伝教ハ
奉テ值弘法ニ十八道伝受シ給ト云也、所以然者、非他人ノ説ニ、伝教ノ同法義真
和尚ノ弟子ニ光定和尚ト云人、後ニ弘法ノ弟子ニ成テ受法灌頂ス、光定和尚ノ説也ト云々
山門ヨリ救云、非光定和尚ノ説ニ、高野法師ノ謀書也云々

山門ヨリ難云、弘法大師ハ未習十八道ヲ、故ニ恐クハ蘇悉地ノ法ハ未灌頂ト可云也云々
十八道ハ依蘇悉地經ニ立之、弘法入唐之時ハ蘇悉地經等未渡也、仍テ未

伝十八道也云々、若尔者何ソ自ラ未習之法ヲ授ト伝教ニ云哉ト云々

又伝教入唐之時モ未渡蘇悉地ノ法、故不相伝之、慈覺大師之時入

唐ソ相承之給也云々、仍テ當時天台ノ真言ト者、皆慈覺相承ト云事也
伝教相承ノ真言ハ不委細故也云々、此等事共能々可尋之、

高野法師云、雖蘇悉地經ハ未渡、蘇悉地ノ義軌渡ル也、故雖經ハ未渡
其法已ニ渡ル故相承給也云々、ム云、此等事能々可尋明也

又慈覺大師入唐之時ハ良譜和尚ト宗顥和尚ト二人ニ值給也ト云々

付之尋云、ハツ仙ニモ值給ト云ヘリ、此二人ノ中ニ何レソ哉、又此二人ノ外カ歟、如何、又
此二人ハ顯密共相承歟、如何

師云

五ニ雜曼茶羅相承者、師云、雜万タラト者、天童部等也云々
付之、天童部ハ大日所說歟、尺迦所說歟ト云事有之、雖尔ト今ハ從尺
尊ニ血脉相承スト見タリ、是依ル一説ニ歟云々

昔有大師名瞿曇ト者、師云、是ハ非祖師ニ只尺尊ノ御先祖ヲ烈ル也
今ハ從尺尊一師資相承ノ次第可取之故也

師云、内証仏法ニハ廣略有之、是ハ略本也、廣本ニハ淨飯等ノ四飯王ノ
子孫等皆書之、又付法相承之祖師達各ノ德行等皆書之云々
可見之、

摩訶迦葉・阿難・商那和修者、ム云、此等ノ天竺ノ二十八祖之
次第与ト止一ノ付法藏ノ次第少シ異也、引合テ可見之、止ニハ列二十

三祖ヲ、此二十三人ハ大小乘并ニ宗門等ノ皆祖師也云々、止一ノ勘文ニ書之、可見之、
尋云、此廿三人大小乘并宗門相承之祖師ナル事如何

師云、此等祖師皆大小乗ノ法門并宗門等ノ法門ヲ相承スル故ニ小乗ノ祖師ニモ
如此一列之、宗門等モ如此列也云々

後魏ノ達摩和尚者、是ハ今マ宗門ニ所云達磨和尚是也云々
菩提達磨ト者、別人也云々、ム云、宗門相承次第可尋之、

第二天台法花宗相承中

常寂光土第一義諦者、師云、是即内証三身ヲ列ル也

常寂光土第一義諦者、法身也、靈山淨土久遠実成ト者、報身

也、多宝塔中大牟尼尊ト者、應身也、付之、寶塔ヲ為法身一ト、多

宝仏ヲ為報身一ト、尺迦ヲ為ル應身一ト様有之、又多宝仏ヲ為法身一ト、尺迦ヲ
為報身一ト、分身ノ諸仏ヲ為應身一ト様有之、二ノ尺也、今者尺迦ヲ為ル應身一ト
義也云々、付之尋云、若如此云者、對テ自身内証ノ仏ニ相承スト可云一
歟、如何、師云、不尔一ヲ、内証三身開発スル之時、必靈山ノ尺迦來テ一体ニ

冥合シ給ヘキ也、所謂、天台大師三昧開発給之時、内証三身顯現ス、其時、必
靈山ノ三身即一ノ尺迦來テ一体ニ冥会シ垂レ加被ヲ授法ヲ可給也
故内証開ル之時、直ニ対ゾ釈尊ニ付法相承給等也云々、故内証仏法相
承血脉ト云事也云々、ム云、此一段能々可口決之、

師云、今ノ三身ハ共ニ居ト寂光ニ可云也、法身所具ノ三身ハ共ニ居ト寂光ニ可云故也云々
ム云、尋云、何ソ以久遠実成ノ仏ヲ已身内証ノ仏ト云哉、ム云、
釈迦如来久遠成道皆在衆生一念心中ト云ヘリ、故知久遠実成ノ

仏モ多宝塔中大牟尼尊ト云モ是皆己心所具ノ仏也、故如此云也、如何

師云、

尋云、天台ハ五品之位ニテ御ス故ニ内証三身顯ト之云モ只観見ノ分ト可云歟、又
外用之面ハ雖五品ナリト内証ハ尚叶上位ニ給歟、如何、又三昧開発之時
叶第五品ニハ給歟、従本第五品ノ位歟、

師云、五品ト云徵ナレハ觀見也、深信觀成ノ人、内証三身ヲ可觀見故也、

普賢觀経ニ仏摩頂説法シ聖師現前ノ戒体具足スル等事委細ニ説

可見之云々

尋云、天台何必モ迹ニ住五品ニ給哉、意如何

義云、若住名字ノ位ニ給ハ名字ハ未有觀行、若住聖位ニ給ハ聖位觀行ハ深位ナル
故ニ非凡夫ノ行相ニ、故住テ外凡五品ノ位ニ修シ觀行ヲ令メ衆生ニ勸進觀行ヲ給也、住五品ニ
給事意在之云々、ム云、此師義徵也、此事余処有之、可見之、

第二天台法花宗相承中

常寂光土第一義諦者、大体如前、是則内証仏法血脉

相承ノ次第也、師云、付之又二意有之、一ニハ内証血脉相承徵也、直ニ南岳・

天台ト図スル是也、二ニハ常^ネノ資師相承ノ血脉次第ノ徵也、所謂、摩訶

迦葉・阿難、乃至南岳・天台等図セル是也、是ノ次第ハ非内証仏法血脉

相承ニハ也、世ノ常ノ相承次第也云々

提多迦・弥遮迦者、付之尋云、止觀ノ一ノ付法藏ノ次第ニハ弥遮

迦・提多迦ト列ス、又次上ノ宗門相承ノ列ノ次第ニハ弥遮迦・提多迦ト云ヘリ

不同如何、何ヲ為正ト、何ヲ可為誤哉

師云、

龍樹菩薩、天竺ノ須利耶蘇摩者、師云、須利耶蘇摩那三藏ト

可云也、今ノ文、那三藏ノ三字略セル歟ト云々

尋云、止一ノ付法藏ノ次第ニハ既ニ列ヌ二十三人ヲ、今何不尔哉

ム云、止一ハ惣ノ付法相承ノ次第列之、今ハ依龍樹所造之論ニ惠文妙悟シ給故直ニ從龍樹相承ノ次第ヲ図ル也、故無相違歟ト覺也

如何、如此可得意歟

師云、

尋云、直ニ從龍樹ニ可列ヌ惠文禪師ト、何ソ列ル羅什等哉

師云、直ニ從龍樹ニ図ル次第ハ大論ノ作者ニテ御ス故也、今如此列ル事ハ

羅什三藏彼ノ論ヲ翻訳ノ來リ給故ニ如此列也云々

付之尋云、若尔者、惠文直ニ羅什ニ相承ト之ニ可云歟、ハタ只依テ所
訳ノ經論ニ妙悟シ給ヘハ、約此辺ニ如此列歟、如何

師云、南岳ハ対ノ羅什ニ法門相承給事有之、爾者、惠文モ值テ羅什ニ
法門相承シ給事モ有之歟、分明ニ不覺一事也云々、設尔事有之
トモ、今ノ次第ハ非其義辺ニハ也、只依テ所訳ノ經論ニ開悟給故ニ如此
列ヌル徵リ也云々

尋云、羅什ハ值テ須利耶蘇摩那ニ法花并ニ大論ヲ相承給歟、如何
師云、尔也、法花伝ニ可弘通法花一ヲ旨ヲ羅什ニ相伝シ給事有之、一紙
許ノ書也云々、仍テ羅什ハ相承ノ須利耶々々々ニ翻訳給也、故如此列
也云々、法花伝ノ羅什相承ノ文、可見之云々

尋云、止一ノ付法藏ノ次第ハ二十三人也、其中ニ龍樹ハ第十三ノ祖也、龍樹
已下ニ十人也、尔者、今龍樹ヨリ須利耶々々々ト列事如何、須利耶
々々々直ニ值テ龍樹ニ相承スト可云歟、ハタ廿三人ノ終リノ師子ニ相承セルヲ中間ノ
十人ヲ略メ云須利耶々々々ト歟、何様ニ可得心哉

師云、

大智度論者、付之尋云、一心三觀ノ血脉相承ヲ云ニハ惠文

依中論ニ云々、今何云大智度論ト哉

師云、此事唐土ヨリ諍也、或依大論ニ云々、或依ト中論ニ云々、依ト大論ニ
云義ハ依ト中論ニ云義ヲハ訛セル也ト云テ非ト之云々、是一師義也、雖尔ト

一辺ニ不可非之、所以然者、伝教大師既ニ入唐之時、此二途ヲ相

承給ヘリ、仍テ一心三觀ノ血脈ノ中ニ慶命流ニハ依中論ニ云々、サテ
今ノ内証仏法相承ニハ依ト大論ニ見タリ、又一心三觀ノ相伝ニモ

五箇ノ相承有之、其中ニ慶命流ハ依中論ニ云々、余ハ不尓也

仍テ伝教ノ御相伝ニ二ノ徵有之故也云々、其中ニ内証仏法血脈

相承ノ意ハ大智度論ト云也、一辺ニ不可局一事也云々

仍テ引ニハ大論ヲ三智實在一心中得ノ文引之也、引ニハ中論ヲ因縁所生法

等文引之云々、故別メ論義ニス、可見之、依ト大論ニ云々、論義ノ々也

又云、源海ハ大無畏論ハ即大智度論也ト云々、師云、難云、此

義僻事也、今家ノ尺ノ中ニ各別ノ論ト見タリ、所謂、大無畏

論・大莊嚴論・中論トノ三部論ヲ龍樹所造ト云々、サテ

中論ハ大無畏論ノ因縁品ヨリ略出ノ名中論ト給也云々

尋云、尔者、大智度論ハ三部論ノ外歟、如何

師云、嘉祥ノ尺ニハ中論ハ大論ノ骨髓也ト云々、但依此尺ニ一論トモ必モ不可得

心歟、惣ソ共ニ龍樹所造ノ論ニソ法門同ケレバ如此尺ルニモ有ラン、又一論ト尺歟、但

一家ノ尺ノ中ニハ如此尺ル事無之云々

双林寺ノ傳大士者、付之、於傳大士ニ不同有之、是ハ弥勒

傳大士ノ事也、俗形也、或云、玄朗ヲ云傳大士ト事有之云々

尋云、玄朗大師ヲ傳大士ノ六世之孫ト云事如何、依之玄朗大

師ヲ云傳大士ト歟、如何

師云、依之玄朗ヲ非云ニハ傳大士ト也、此外ニ云事有之云々、此ヲ只

從リ傳大士六世ノ孫ト云事也、玄朗即非云ニハ傳大士ト也

尋云

、傳大士六世之孫ト云事如何、仏法相承ノ徵ヲ云時、從リ傳大士ニ第六代ノ弟子ト云事歟、ハタ傳大士ノ子孫トノ第六代ト云事歟、

師云、付テ仏法相承ノ次第ニ第六代ノ弟子ト云事歟ト云々、此人今帰テ天台ノ

仏法ニ相承之ニ給等也云々、ム云、可尋之、

又傳大士ハ弥勒化身ニシテ而又宗門ノ人也、雖尔一ト依中論ノ意一、歷テ四運ニ一心三觀用之ニ給ヘリ、故知四運推換ノ觀ハ甚深ノ事也ト妙樂モ引之給ヘリ、又指要抄ニモ引之ニ云々

第三円教菩薩戒相承中

蓮花台藏世界者、付之、又ニ意有之、一ニハ直ニ從リ盧遮ニ

相承ノ徵也、是即内証仏法相承ノ意也、所謂、大蘇道場ニシテ三昧開発

之時、聖師現前ノ受戒ノ意也、二ニハ世ノ常ノ相承ノ徵也、所謂、逸多

菩薩・鳩摩羅什・南岳・天台ト列ヌル是也云々、逸多菩薩ト者、弥勒ノ事也

付之尋云、於大蘇道場ニ三昧開発之時、聖師現前之受戒ナラハ靈山

一会現前未散ト云故ニ菩薩戒相承モ可云靈山淨土釈迦牟尼仏等トラ

何ソ云如此哉、

師云、三身即一四土不二故ニ靈山即花藏世界也、釈迦即盧遮那仏也、故如此

云也、但又三身即一ナル中カニ云盧遮那ト、四土不二ナル中カニ云花藏世界ト事ハ

今ノ菩薩戒者梵網ノ三聚淨戒ヲ可為本ト故ニ彼經ノ說処ナル故ニ云花藏界ト、又

盧遮那所說ナル故云ルサナ仏ト事也、雖尔一ト靈山之外ノ非花藏世界ニ釈迦ノ

外ノ非ルサナ仏ニ也、以此等ノ意可得意也云々、故菩薩戒相承モ内証仏法

血脉相承ノ徵ハ大蘇道場ノ三昧開発之時也云々、普賢觀經ノ聖師現前ノ受戒可見之、其意也云々

又世常^ネノ血脉相承徵ナラハ逸多菩薩ハ受ケ盧遮那ニ、羅什ハ受逸多ニ、南岳ハ受羅什ニ、天台ハ受南岳ニ給等也、仍テ伝教大師入唐之時ハ

対ノ道遂和尚ニ受之ニ給也、円頓戒ノ受戒ノ作法次第等相伝之ニ給也云々
仍テ日本國ニゾモ興行之ニ給也、凡円頓戒ノ受戒ノ作法等別ニ可沙汰之ニ事也、今只血脉相承ノ徵許也云々

尋云、第一ノ天台法花宗相承之時ハ惠文・南岳ト列之ニ、今菩薩戒相承之時何羅什ヨリ直ニ南岳ト列ヌル哉、菩薩戒ヲハ惠文ハ不ト相承ニ可得意ニ歟、ハタ雖相承給一ト南岳ニハ不相伝玉ニ歟、如何

師云、如ハ今ノ譜脈ノ直ニ羅什ヨリ南岳相承ト可得心ニ也、惠文ニハ不相承ニ覺也ム云、今譜脈ノ面尔也、余処ノ口伝等可尋之、

第四胎藏金剛両曼荼羅相承中

師云、是伝教入唐之時、真言相承之次第也云々、胎藏界ハ依大日經ニ、金剛界ハ依金剛頂經ニ仍其相承血脉次第也云々、十八道ハ依蘇悉地經ニ、故

伝教入唐之時ハ此經未渡也、仍テ御相伝無之云々、仍其後慈覺大師

入唐之時相承之給也云々

中天竺大那^{ナラタ}蘭陀寺者、師云、那^{ナラン}蘭ト雖可ト讀、那^{ナラタ}蘭陀寺ト讀也云々
大唐泰岳靈巖寺者、ム云、如此可讀歟、又靈巖寺ト可讀歟、

師ノ点不分明ニ、可尋之、

第五雜曼荼羅中

師云、雜万タラト者、天童部等也云々、如前書一カ

惟象和尚

依例ニ加ヘシ名ヲ者、師資相承次第依テ其例ニ、其ノ名ヲ可書加一等也

庶示スニ法ヲ有在也者、師云、有在者、ユヘアリト云事也云々

撰定シ上者、尋云、此血脉ヲ撰定ソ國王ヘ為メニ叢□ノ被ルト進上ニ云事歟
故ニ云上一ト歟、ハタ此血脉ヲ撰定シ畢ルト云事歟、如何

師云、

真忠筆受者、尋云、一人ノ可書之、何此ノ小書ヲ真忠ト顯然ト二人

筆受ト云哉

師云、真忠ハ草案、顯然ハ清書也云々

尋云、伝教大師ハ律僧形ニノ御歟、如何

師云、爾也、行表和尚モ乃至六宗ノ長者皆律僧形也云々、而伝教

大師破ツテ鉄鉢ヲ可持木鉢ヲ被仰一事有之、疑云、律ニハ木鉢外道ト

云テ令持鉄鉢等ヲ、何伝教如此被仰哉、師云、律門ノ所説ハ小乘

外道ノ説也、然ニ一辺ニ偏執木鉢外道ト云故ニ為破カ彼ノ偏執ヲ、如此被仰哉
□云、可尋之、伝教如此被仰一事定テ可有子細一事也、偏ニノ存律

文所説ヲ不可破之歟

尋云、伝教帰朝之後、六宗ノ長者皆歸伏セハ、行表和尚ハ本ト師範也

是同ク帰伏給歟、如何

師云、伝教帰朝之後ハ停テ化ヲ門徒ノ衆ヲ皆伝教ニユスリ給ケリト云々、故知

帰伏給者也

三諦部相承秘伝辻中

三諦部者、尋云、何不シテ云三大部一ト云三諦部一ト哉

師云、三大部ヲ約ル三諦ニ之時、玄義ハ約仮諦ニ、文句ハ約空諦ニ、止觀ハ約中諦ニ故三大部者即三諦也、故云三諦部一ト也云々

師云、南岳大師ハ法花ハ心仏衆生ノ三法妙ト得給ヘリ、天台大師ハ受テ此ノ相伝ニヲ広ク尺三大部ヲ給之時、約三法妙ニ如此尺給也云々、又指要抄ノ終ニモ三諦部ノ事有之、可見之云々

尋云、此ノ三諦部ノ相承秘伝辻者、誰人ノ作ソ哉

師云、是ハ伝教大師入唐之時、対ノ道遂和尚ニ相承シ三諦部ノ頓旨ト云物ヲ給ヘリ、其ノ中ヨリ是ハ書出給也、頓旨ハ猶是ヨリモ委細事共有之

三諦部ヲ図ニシタル様有之、故余人ノ非所述也云々

師云、皇覺法橋ノ枕双紙ト云者、今此ノ三諦部ノ辻也云々、可思之尋云、何如此配当スル哉、其意如何

師云、玄義ヲ約仮諦ニ事ハ三法妙之中ニハ玄義ハ約衆生法妙ニ、衆生法妙ト者、

広ク約十界衆生ニ、故亘迷悟ニ広ク尺ス一代四教五時一切万法ヲ、故是仮諦也云々又約十界衆生ニ、広ク尺ル故ニ三法妙之中ニハ約ル衆生法妙ニ也

又玄義ニ雖有ト空中ニ二諦モ是皆為仮諦ヲ本一ト故ニ仮諦所具ノ空中ニ二諦也云々

故ニ仮諦ヲ為主也、故云空諦ヲ之時ハ云仮カ中カノ空一ト、云中諦ヲ之時ハ云仮カ中カノ中一ト也又尺名ノ中カノ空ナリ者、玄義ハ尺ル妙法蓮花ノ名ヲ故ニ尺名也、故尔云也云々□□尺名ニ故ニ約衆生法妙ニ事如何、ム云、妙法蓮花十界ノ衆生ニ皆具足セル事ヲ

□□□スト云故歟、師云、

□□、円融、相即、互具者、「」付之尋云、空諦ノ下ニハ円融、相即、互具ト列ネ
中諦ノ下ニハ相即、互具、円融ト列ラヌ、付之私案ルニ之、円融ヲ約シ空諦ニ、相即ヲ約シ中諦ニ、互具ヲ
約ル仮諦ニ歟、仍テ空諦ノ下ニハ先ツ云円融ト・中諦ノ下ニ先云相即一ト歟、仍テ以下ノ三法妙ノ
配当ノ下、三身配当ノ下ニモ皆如此見タリ、爾者如ノ此意有ト之可得意歟、ハタ必モ雖
不スト尓「自然ニ如此次第セル歟、如何」

師云、必モ非其意ニ也、自然ト如此書也云々、ム云、猶不宜也、余処尺可思合之
後日ニ師云、空ヲ配円融ニ、中ヲ配相即ニ、仮ヲ配互具ニ事有之也云々

尋云、七番共解ト者、何様云事哉

師云、七番共ニ解尺スト五重玄ヲ云事也、玄義ノ七番共解ト文句ノ四種ノ尺ト、止
觀ノ五重ノ大綱トハ皆同事也云々、五重ノ大綱ト者、表章印証等也、可見
之、當時世ノ常ノ人ハ止觀ノ五重ノ大綱ト云事ヲハイタウ不云一事也云々

約三法妙中

尋云、玄義ハ尺名也、尺名ノ故ニ約ル衆生法ニ歟、其意如何

ム云、玄義ハ亘十界ノ衆生ニ皆妙法蓮花ノ体ナル事ヲ尺スル故ニ玄義ハ
約衆生法妙ニ覺也、可思之、仍テ尺妙法蓮花ノ名ヲ之時約衆生法ニ尺歟、
師云、

約三身中

尋云、何ソ玄義ヲ約応身ニ哉、

師云、玄義ハ約ノ衆生法ニ広ク亘テ十界、四教五時等ヲ尺ス、是応身ノ所説ノ法也
故対ル応身ニ也、故是又仮誦ノ意也

五重玄中

名ハ三諦、体ハ中諦者、尋云、何ソ名ニハ三諦ト云ニ体宗用ニハ中空仮ヲ次第ニ配当スル哉、

師云、尺名ハ具ニ尺三諦ヲ故也、体ハ中諦也、宗ハ空諦也、用ハ仮諦也、故如此ニ配当スル也云々、所謂、尺名惣論三徳、体宗用開対三徳ト云尺ノ意也、教ハ又上ミノ三諦ヲ判尺スル故云三諦ト也云々開漸四教五時者、師云、四教五時ノ教法ハ皆漸ノ中ヨリ開出スル故也、所謂、漸中開四ノ意也云々

約二妙ニ中

当分待絶者、師云、当分通於一代、於ハ今ニ便成相待ノ尺ノ意也、爾前當分雖有ト待絶二妙、対ハ今法花ニ皆成相待妙ト等也、爾前ニ雖有円皆□種ヲ故也云々

跨節待絶者、跨節唯在今經□□非適今也ノ意也

惣ノ今經ニ付テ有ルニ待絶二妙ニ有二意、一二ハ爾前今經相待ノ爾前ハ龐也、今經ハ妙也ト云是相待妙也、二ニハ約体内ノ權ニ名相待妙ト也、又本門ノ相待妙ト云時ハ本迹相待ノ名相待妙ト事有之云々、此等尺可見合之観心絶者、観心ニハ只絶待妙ニノ相待妙無之、故尔云也云々

尋云、当分ノ下ニハ仮空中ト列ネ、跨節ノ下ニハ空仮中ト列ネ、観心ノ下ニハ中空仮ト列ヌ

其意如何、師云、當分ハ四教八教等広ク尺スルハ仮諦ヲ為面一ト故也、觀心ハ有テ三諦一、以中一ヲ為本一故也、跨節ハ以空ニ可為本一ト故也云々

文句中

文句空者、尋云、如何空ナル哉、

師云、文句ハ三身之中ニハ報身也、報身ハ智也、智ハ空也、故爾云也云々、ム云、法花ノ教主ハ異義ナレトモ報身ト云一義ノ意也、仍テ今ノ配当報身ト云々

又尺字ノ中カノ中ナリ者、文句ハ尺ス法花一部ノ文字一ヲ故爾云也云々、譬ハ如シ云玄義ハ尺ル名一ヲ故ニ尺名ノ中ノ中一ト也

約三法妙一中

仏法妙者、尋云、何ソ文句ヲ約仏法妙ニ哉、

師云、文句一部始終ハ皆尺ス仏所說ノ經一ヲ故ニ約仏法妙ニ也、仍雖有ト三法妙ニ以仏法妙ニ為面トニ也云々

約四種尺中

建立四教五時者、付之尋云、玄義ニハ漸中四教五時ト云ニ文句ニハ建立ノ四教五時ト云事、如何

師云、玄義ハ漸中開□□ナル故ニ尔云也云々、文句ハ尺ス円經一ヲ、仍テ円經ノ中ニハ不可有四教五時ノ不同一、雖尔一作ル約教ノ尺一ヲ之時、建立ノ四教一尺之、故ニ云建立ノ四教一ト也云々

止觀中

止觀ハ中者、止觀ハ雖有ト三諦、觀己心ニ故以中道ニ為面ト故也云々
 又尺心ノ中ノ仮ナリ者、止觀ハ約心法妙ニ尺之、故ニ爾云也云々、止觀ノ々門觀ルヲ己
 心ヲニ為先ニト故也、仍テ約ル三法妙ニ中ニハ約心法妙ニ也、又約三身ニ之時ハ約法身ニニ心法即
 法身中道ナル故也云々

五略中

発大心地獄者、尋云、何以地獄等ニ次第ニ配当スル五略ニ哉、心如何

師云、是ハ非別ノ子細ニ以十界ヲ配当スル十章ニ之時、前六重ハ妙解ノ位也、妙解ノ分齊ハ
 皆五道六道ノ凡夫之位也、故五略ニ五道凡夫ノ位ヲ次第ニ配当スル許也、非別ノ子
 細ニ也云々

十章中

尋云、何声聞ヲ配当ル正觀ニ哉、

師云、是又非別ノ子細ニ也、前六重ヲ配当スル六道ニ事如前ノ皆凡夫無行位也

正觀ハ既住觀門ニ故配当ス声聞ニ、又果報已上ハ皆聖位ニ聖位ヲ配当スル等也云々

仍此外非別ノ子細ニハ也云々

尋云、玄義ニハ漸中四教ト云、文句ニハ建立四教ト云、今止觀ニハ觀心四教五時ト云事如何
 ム云、止觀ハ觀ヲ己心ヲ為本ニト、故四教五時ノ教門皆己心所變ト觀スル故如此云歟、
 師云、尺ル說己心中所行法門ノ止觀ヲ之時還テ借テ四教等ノ教文ヲ尺之ニ故尔云也
 還借教味ニ以テ顯妙ニ円、故知一部之文共成圓乘開權妙觀ト云ヘル文ノ意
 是也云々、ム云、此文ノ意ハ必モ不爾歟、可思之、彼ノ尺ノ前後可見之

尋云、三大部ノ中ニ勝劣如何

師云、或止觀勝タリト云義辺有之、或云止觀劣ト云義边有之、所謂約ル法ノ高下ニ之時ハ止觀尤勝レリト云義边有之、所以然者、仏法甚^タ高ク衆生法甚^タ廣シト云故玄義文句ハ高広ニ^ノ勝タリ、衆生法ハ亘十界ニ通ス迷悟ニ故広也、止觀ハ只約己心ニ故ニ只局迷心ニ仍テ尤劣也ト云辺有之云々、又止觀勝尤タリト云辺ハ尺ル法ノ深意ヲ事止觀尤勝タル故也、仍テ辺々意有之云々

宗要集抽辯縮中

師云、此ノ宗要ノ辯ヲ授ル之時ハ宗要皆沙汰畢、後ニ慈惠大師ノ御影奉テ懸一供具等ヲトトノヘ御布施物等用意ノ宗要沙汰セル衆徒寄合テ雜掌取當テ師匠ヲモ

奉供養一相伝之等也、為人^一授之時ハ如此可為^一也云々、惠心流ニ如此スル也、維仙等ハ極此等事ヲ不受^一被云^一ケリト云々

ヌキテテツシヲツツム

宗要集抽辯縮

良源ノ作者、御廟ノ御作ト云々

尋云、宗要ノ得名、如何

師云、或云、宗要者、天台一宗ノ要ナル故ニ名ト宗要^一ト云々、或云、御廟ノ大師^ニ宗論^一ノ、宗論ノ為タル要^一事ヲ集メ給故名ト宗要集^一ト云々、或云、宗要ト者、玄義ノ五重玄ノ中ノ宗也、宗ト者、要也ト尺スル也、玄文ノ尺可見之、但今ノ意ハ玄文ノ中ノ宗ト云ヘリト云々、可思之、ム云、宗要ノ見聞可見合之

康保元年

八宗之根源者、八宗ト者、花嚴・天台等ノ八宗也云々

八弘異者、八弘ト者、八宗也、ム云、何八宗ヲ云八弘一ト哉、
ム云、弘通スル一代教法ヲ八宗也、故ニ云八弘一ト歟ト覺也
尋云、可云八弘一ト歟、可云八ツ弘一ト歟、如何

師云、何トモ可読一也云々、可思之、

八藏者、付之尋云、八藏ト者、如何、ム云、玄文ノ第十ノ終方ニ明ス經
論諸藏ノ離合ヲ中ニ、或云二藏一、声聞藏、菩薩藏也、或云三藏一、加雜藏一、或云
四藏一、加仏藏一、此等皆各配当四教ニ、又引菩薩処胎經ヲ有八藏ニ云々

玄文云、菩薩処胎經ニ八藏アリ、謂ク胎化藏、中陰藏、摩訶衍方等藏、戒律藏
十住藏、雜藏、金剛藏、仏藏、若胎化藏、中陰藏未為ニ阿難ニ説

時、即是秘密教ナリ、為阿難ニ説時、即是不定教ナリ、摩訶衍方等藏ハ即頓教ナリ
戒律藏ヨリ去五藏ハ即漸教ノ中ノ之次第ナリ、戒律藏ハ即三藏教ナリ、十住藏ハ即
方等教ナリ、雜藏即通教、金剛藏ハ即別教、仏藏ハ即圓教ナリ、然モ仏意難測
一往相望テ作此ノ会通ヲ者、ム云、今八藏ト者、此八藏ヲ云歟、如何

師云、此八藏ハ一往相望ト云ヘリ、實事以之ニ非証四教八教ヲ也云々

ム云、爾者、私案云、小乘ノ修多羅、毘尼、阿毘曇ノ三藏ト大乘ノ修多羅、
ヒ尼阿毘曇ノ三藏ト菩薩藏ト声聞藏トヲ合ソ八藏ト可云ニ歟、以之ニ配当スルニ
八宗ニ自然ト合セリ、所謂、小乘ノ三藏ハ如次第一、俱含、律、成実ノ三宗
也、大乘ノ三藏ノ中ニ毘曇藏ハ可配三論・法相ノ二宗ニ

歟、三論宗ハ以中論・十二門論等ヲ為本一ト、法相宗ハ以唯識論為本一ト故也
修多羅藏ヲハ可配当ス天台・花ム・真言ノ三宗ニ歟、天台ハ以法花經為依經
花ムハ以花ム經ヲ為依經一ト、真言ハ以三部經ヲ為依經一ト故也、サテ毘尼藏ハ惣メ
五ヶ大乘ニ通ス、又声聞藏ヲハ配当小乘三宗ニ、菩薩藏ヲハ惣メ大乘宗ニ配当ル

歟、如此可得心歟、如何

師云、何様ニモ宣様ニ可得意也云々、別タル義無之、ム云、可思之、
八教ノ心肝ヨリ八葉ノ各ノ宗々方取者カタトル、八葉者、即八教也云々

師云、智証大師ノ尺ニ八葉表彼八教ト云々、又五時ハ即五仏ト尺給ヘリト云々

八葉者、真言ノ八葉蓮台也云々、付之尋云、今者顯教ノ法門也、何ソ

云真言ノ八葉ト哉、師云、今ハ惣ノ顯密一致ノ以意、如此云事也云々

宗々方取者、八宗ハ形取ル八葉ニ也云々、付之尋云、方取ト者、可書ク

形取ト何ソ如此書ク哉、師云、雖爾ト今只仮名書カシナカキニ如此書也、不苦也云々

ム云、又如此書ク様モ有之歟、可尋之、不可局一边ニ歟、

発願ノ法師者、慈惠ノ御事也云々

御經藏ノ於テ御前ニ立テ得八葉蓮花者、付之尋云、依此夢想ニ八十

四ノ文題ヲ作リ給ト可得心歟、如何、師云、爾也、八十四者、八十八表八

葉ヲ、四ト者、表四教ヲ等也、以下ニ如此見タリ、今四教ノ文雖無之、八葉蓮花ト云即八教ナル故ニ四教可有之故也、仍次下ニハ四ト者、四宗開示悟入ト云ヘリ四宗ト者、四教也云々、ム云、以下ニ血脉相承ノ次第ヲ云ニ以初夢想ノ告、良源

伝之ニ云ヘリ、故知ヌ依此夢想ニ立八十四ノ文題ヲ給ト云事也、可思之、

次ノ日天空ニ響ノ音アテ者、尋云、響音者、誰人ノ音ト可得心歟、山

王大師ノ御告歟、如何、師云、尔可得心歟、不分明云々、ム云、可尋之、

而二而二ト告者、尋云、心如何、三諦相即レトモ而モ止觀ハ中諦ヲ為主ト、玄

義ハ仮諦ヲ為主ト、文句ハ空諦ヲ為主ト、故相即ノ上ニ尚三諦而二ノ義存之故也

仍テ存ノ相即ノ一边ニ不可失而二ノ辺ヲ、故ニ如此三諦部モ尺シ今ノ告モ如此

云事歟、如何、師云、尔也、譬ハ如冰水雖一也ト而冰水各別ナル等ノ

也、仍如此云事也云々

三世ノ諸仏実權之二智者、尋云、茲レニ因ヨテ三世ノ諸仏ノ実權二智円
實菩提之一理也ト云意如何、ム云、三諦相即ノ一諦ナレトモ而二ノ辺有
□告ノ、三世諸仏ノ權實二智ハ只円實菩提之一理ナレトモ而權實

□ニシノ不相□辺有之、故此義辺ヲ例同スト覺也、可思之、

於ハ時ニ三劫者、師云、三劫ト者、三妄執也、三妄執ト者、龜妄執、細
妄執、極細妄執也、龜妄執ト者、見思也、細妄執云々、塵沙也、極細妄
執者、無明也云々、大乘ノ意ハ三大無數劫ト者、只三妄執ト得心也
非實ニ經ルニ三大無數劫ノ修行ヲ也、故三劫者、三妄執也云々
付之尋云、今如此云意如何、ム云、三諦相即トモ而モ而モ而ノ

辺有之一事ヲ云時、万法一心一念也ト云ヘトモ而三妄執ノ差別有
之引合歟ト覺也、劫ト者、時也、時ニ雖無差別而三妄

差別アリト云歟ト覺也、可思之、如此可心得歟、如何

師云、

於四教只四阿若ナリ者、四阿若ト者、四種ノ阿字也、所謂ア・ア一・

アン・アク四字也、發心修行菩提涅槃也、阿若ト者、梵語也、此ニハ翻ス

不生ト、ア字亦不生也、対四教ニ之時ハ、アハ圓教、ア一ハ別教、アンハ通教、アクハ三
藏教也、對方ニ之時ハ、アハ東方、ア一ハ南方、アンハ西方、アクハ北方也、如次第發心修
行菩提涅槃也、対八識ニ之時ハ、第八識ハ東方、南方ハ第七識、西方ハ第六識、北
方ハ前五識也、対四智ニ之時、如次第一、大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、常所作智也
対五色ニ之時ハ、東方青色、南方黃、西方赤、北方白也、此等ノ配当多々也、可思之、

於ハ理ニ空有一門者、四教ハ只四種阿若也、非別ノ物ニ、於理者只空有ノ

二門也、於仏ニアバンニ二字也云々、アハ空也、バンハ有也、即空有一門也云々

宗者兼但対□之修行覺道ノ法者、師云、爾前兼但対□ヲ為因

□法花ヲ為シ果ト意也云々、付之疑云、於法花一円ノ中ニ可有因果、何如此云

□、師云、於法花一円ニ有因果一事勿論也、雖尔ト又尔前ヲ為因ト、法花ヲ為果ト

□可有之、其中ニ今如此云事此意也云々、爾前方便ノ依テ因ニ、法花開会ノ至ト果ニ事何無之哉、ム云、汝等所行是菩薩道ト開会スル之時ハ爾前ノ行全体

一円法也、若尔者、尔前方便ノ法全分法花一実ノ因ト被云一事也、仍

如此可云歟、可思之、

多才者、多宝ト云事也、才ハ宝義也、积迦ハ應身ナル故ニ有

門ト云々、多宝ハ空門者、報身ト云ト覺也、可思之、

玄文ノ宗故也者、師云、今ノ宗要ト者、玄義ノ五重玄ノ中ノ宗也ト

云事也、宗ノ一字ヲ分ヲ宗要ノ二字ト云義也、宗ト者、修行ノ因果也、故今所云宗要ト者、五重玄ノ中ノ宗也、仍テ玄文ニハ宗ト者、要也ト尺セリ、可見合之

又宗要ノ得名ヲ云時、宗要ト者、五重玄ノ中ノ宗也ト云義今ノ意也云々

八十ト者八宗八葉者、八十ト者、表八宗八葉ヲ也ト尺也、四十ト者四宗ト

者、師云、四宗ト者、今所ハ云四教ヲ云四宗ト也云々、故八十八表シ八葉ヲ、四ハ

表ル四教ヲ等也云々、又表開示悟入ヲ等也云々

四々十六門者、尋云、意如何、師云、是四教四門ハ即四々十六門也、是

即十六大菩薩ヲ表スル義也云々

四依衆論弘通スト瑜伽四宗阿若者、意如何、師云、四依弘經ノ菩薩造リ

論ヲ弘通スト瑜伽四宗阿若ヲ云事也云々、瑜伽ト者、真言教也、四宗阿若ト

者、ア・アーチ・アン・アクノ四種ノ阿若也、又ハ四阿若ハ四教也、ム云、此等事師ノ義不分明ニ可尋之、仍テ弘経スト瑜伽四宗阿若ヲ可読也
龍鉄者、師云、龍ト者、龍宮也、鉄者、南天ノ鉄塔也、密教ハ鉄塔ヨリ開出之、顯教ハ龍宮ヨリ将来スル等ノ意也

智母閣樓者、師云、文殊樓ト云事也云々、文殊樓ノ前ヘニゾ立テ得八葉蓮

花ヲ等夢想是也云々、付之疑云、此夢想ハ於御經藏前ニ見ト得ト之上ミニハ云ヘリ

□御經藏ト文殊樓ト一処ト可得心歟、如何、師云、文殊樓ハ上ミニ也、御經

藏下也、仍テ御經藏前ニゾ得之、飛ト空天ニ見給ヘル故ニ文殊樓ノ方ヘ飛昇

給故ニ如此云也云々、ム云、此事頗ル不宜也、可尋之、今所云智母閣樓ハ

必モ非其時ノ夢想ノ事ニハ歟、惣ノ文殊ハ智恵体ニゾ御ス、故顯密共ニ文殊智母

閣樓ヨリ出ツト云事歟、又其ノ夢想ノ外ニ於文殊閣樓ニ感得シ給ヘル事有之

歟、可尋之、

以レタリ運フニ自他ノ侮^{アナヅリ}以レタリ遁^{タカヒ}ニスルニ奸厄^{カンヤク}ノ語ヲ者、尋云、意如何

師云、如此依テ夢想ノ告ニ八十四ノ文題等書之事、自他ノアサケリニ似タリト

大師卑下ノ語ヲ書給也云々

従此ニ已來カタハ有テ契^{カナウ}コト八弘ニ旁貯^{タクワ}タリ顯密一道ノ辻^{ツシ}者、ム云、今八十四ノ文題亘八宗ニ故云有ト契コト八弘ニ歟ト覧也、八宗者、顯密二宗也、故云、貯タリト顯密一道辻ニ歟、顯密一道ノ大辻沙汰之故也、師義分明ノ沙汰無之、可思之、

只驟アツム一味醍醐之内ニ者、ム云、八十四ノ算雖貯タリト顯密一道ノ辻ニ、只是

一味醍醐之内ニゾ非ト余法ニ云歟ト覧也、師義不分明ニ可思之、

又贖^{アカ}ウ八仏之眸^{マナシリ}ニ者、尋云、八仏ト者如何、八教ノ々主ヲ云八仏ト歟、

師云、爾カ云トモ不可相違一事也、雖爾ト八葉ノ尊ヲ可云八仏ト也、八葉ノ尊ハ四仏四

菩薩ナレトモ是ヲ云八葉ノ尊一ト故也、智証大師ノ尺ニ八葉表彼八教ト云ヘリ故知ヌ八

教ノ々主ト云モ不相違一事也云々

尋疑云、八葉尊者、密教ノ意也、今何如此云哉、

師云、今如此云事ハ皆顯密一致ノ以意ヲ云也、非世常ノ淺近ノ意ニハ也、智証

大師ノ八葉表彼八教ノ尺ノ意モ此意也、此等ノ意ハ皆本来本有ノ八教等ヲ云

事也、乃至七賢七聖等マテモ皆本来常住ノ法ト可云一事也云々

付之尋云、抑顯密一致ト云事ハ何流ノ意哉、

師云、顯密一致ト云事ハ何ノ流ニモ皆可云一事也、所以然者、伝教・慈覺・智証・乃至惠心・

旦那、皆顯密一致ト云事存之給ヘリ、雖爾ト中比ハ深望義トモ不合之ケリト云々

淨明等ノ非真言師ナル故ニ不好ノミ云合給也云々、當時ハ又顯密一致ノ義是ヲ好ミ云也

山門ニモ當時ハ不兼學密宗ヲ、顯者ヲハカタフタ題者トテ不物ノ數トモ也云々

又云、西谷辺ハ皆清僧ニノ非凡僧ニ、所以然者、天台ノ三流ノ真言ノ中ニ蓮花院ノ流ト者、西

谷ニ有之、故ニ皆真言師ナル故也云々

又云、顯豪律師難ノ顯密一致ノ法門ヲ云ク、若一致ナラハ顯密二宗ト不可立之云々

範源法印難ス顯豪ヲ顯密一致ト可云道理立之、重聞記ト云抄ニ書之

可見之云々

尋云、贖八仏之眸ニ云意如何、ム云、今作テ八十四ノ文題ヲ聚テ八教ノ辻ヲ備ナフト八仏ノ知見ニ云事歟、又八教ハ八仏ノ所説法也、然ニ今作テ八十四ノ文題ヲ宣ル八教ノ意ヲ、故ニ八仏今雖不ト説給、以之ハ八仏ノ説ニカヘタリト云事歟、贖ト者、アカフト云ハカヘタル義歟、

如此可得意歟、如何、師云、何様ニモ宜様ニ可得心也云々

故本算ノ初ニ置テ四教四門ノ説ヲ者、八十四ノ文題ノ初メニ置ク四教四門ノ説与ト実理一

相應ス哉ト云算題一ヲ也云々

師云、八十四ノ文題ノ次第、皆御廟ノ大師置之給事可有子細一事也ト云テ惠心流ニハ皆不違其次第一ヲ置之談之等也、重聞記ニモ有此次第二也、又鈍聞記・

引文記ト云抄ニモ皆此次第也、此皆惠心流ノ抄也、可見之、又安居院ニモ

此次第也云々、鈍聞記ハ範源法印ノ作也、淨明ノ流ニ如ト本抄ノ云ハ皆鈍聞記ノ事也云々、又惠心ノ文殊樓答ノ決ノ次第モ此次第也

但今毘沙門流ニ教相・五時・雜・仏・菩薩・二乘ト置次第一ヲ事ハ三井ノ鏡ソ阿闍梨如此置之、付之如モ此可トテ云ニ如此云事也云々

尋云、四教四門ノ説ヲ置ク本算ノ初ニ心如何、ム云、今ノ八十四文題者、即宣ノフ四教八教ノ法門一ヲ、故ニ最初ニ宣フト四教四門ノ説一ヲ云事也、可思之、

入レル噴^セメ諸ノ算題之肝心一ヲ者、諸教ノ肝心ヲ責入ルト八十四ノ算題ニ云事也云々幽言委ク次第二伝ヨ之一ヲ者、宗要ノ秘書口伝等ノ幽言ハ次第ニ

可相伝之云事也云々

此ヲ承伝セン者ハ八葉肝心底之仁也者、此宗要ヲ相伝セン人ハ相承スル八葉ノ

肝心一ヲ人也云々

□初夢想ノ告良源伝之從之已上者、是マテハ慈恵大師ノ御説也云々

已下ハ皆次第相承ノ人々各加書テ其ノ名一ヲ等也云々、初夢想告ト者、御經藏ノ前ニゾ立得八葉蓮花一ヲ等ノ夢想也

惠心年廿一年者、付之尋云、廿一年ト者、廿一年ト云事歟、

師云、不尔、廿一年^{トシ}ノ之間ト云事也云々

忍信者、付之尋云、戒壇房ノ仁真ト余処ニハ云ヘリ、以何一ヲ可為本一ト哉、

師云、忍信也ト云々、可思之、

青 東
黃 西
赤 南
白 北

者、尋云、是ハ何事哉、

師云、是ハ一代四字ノ決ト云物也、是ハ別紙ニ一段ノ習事ニテ有之、今只其四字許ヲ便宜ニ書出タル也云々、対四教ニ之時ハ、東方ハ円教、南方ハ別教、西方ハ通教、北方ハ三藏教也、対八識ニ之時、東方ハ第八識、南方第七識、西方第六識、北方前五識也、対四智ニ之時、如次ノ可知之、此等ノ配当多々也、ム云、別紙ノ口決可習之、

法報應
索釦缸者、師云、是ハ一代三字ノ決ト云物也

是又別段ニ口決スル事也、仍テ別紙ニ有之云々、法報應ノ三身也性タネ応
一アツメ真身者、師云、是又一代二字ノ決ト

云物也、一代真応一身ト云事也、別紙ニ書之、可習之云々

ム云、惣ノ此抄出ヲハ私ニ可自見別ゾ不可伝受トモ不可苦事也トテ不伝受之不宜事ハ後ニ可問之

一心三觀口決中

師云、今ノ口伝ハ四種ノ三諦也、所謂円融ノ三諦、フク疎ノ々々、双非双照ノ々々、本性ノ三諦也、或云、五種ノ三諦一ト也、所謂、此中ノ双非双照ノ三諦ヲ分テ為二ト也云々

涅槃ノ疏ノ行満ノ記ニハ四種ノ三諦ト云々、但双非双照ノ三諦ヲ分テ為二ト、本性ノ三諦ハ無之、故是ハ狹也云々

又云、円融ノ三諦ト者、対境修観ノ三諦ニ有七種ノ不同其一也、ム云、七種不同、如何師云、

又云、双非双照ノ三諦ト本性ノ三諦トハ俱ニ寄名義立ノ三諦也、寄名義立ノ三諦ニ有多種ニ云々、ム云、多種者、如何

師云、

尋云、円融ノ三諦トフク疎ノ三諦ト不同、如何

義云、円融ノ々々ハ一ケノ三諦也、フク疎ノ三諦ハ九ケノ三諦也云々付之疑云、若爾者、円融ノ三諦既ニ九ケノ義有之、既ニ云円融ノ三諦ト知ヌ三諦円融互具スト聞タリ、又云、並是畢竟空、並是如來藏等云ヘリ、三諦

互ニ具スト云事分明也、爾者、何云一ケノ三諦ト哉、

有人ノ義云、如此尋難スル事也、雖爾一ト円融ノ三諦ヲ云一ケト、フク疎ノ三諦ヲ云九ケニ事ハ、所以然者、円融ノ三諦ハ異ニゾ別教□歴ノ三諦ニ、三諦互ニ円融相即スル故名円融ノ三諦ト也、雖爾一ト尚是ハ一ケ三諦ノ分ニゾ相即円融ルス義也、未云、三諦各具メニ三諦ヲ九ケナル色目ヲ也、故尚一ケ三諦ト云事也云々難疑云、既ニ云並是畢竟空等^{トヲ}、三諦各具スト三諦ヲ聞タリ、如何

義云、並是畢竟空等云者、三諦各具トニ三諦ヲ云事ハ爾モ可云歟、雖

爾一ト是尚一ケト被云ニ事ハ並是畢竟空ノ之時ハ三諦共ニ被云空ト並是如來藏ト云時ハ三諦共ニ被云空ト、並是中道ト被云之時ハ、三諦共ニ被云中

道ト、所謂一仮一切仮ナレハ空中トメ無不仮ニ等尺セル是意也、故知並是畢竟

空之時ハ、雖並スト三諦ヲ皆被云空ト、並是如來藏之時、雖並スト三諦ヲ皆三諦共ニ被云仮ト等也、故三諦ノ各別ノ相貌不存之也、仍テ尚一ケノ義ヲ成スル也、故

尚一ケノ三諦ト被云也云々、サテ複疎ノ三諦之時ハ三諦各具メニ三諦ヲ

三諦各ノ相貌存ノ之、而円融相即スル等也、故九ヶノ三諦ト可被云一也、仍此ノ不同ト覺也、能々此本トヲ可分別一事也云々

ム云、此義宜歟ト覺也、如此不ゾハ得心分一ス、不同難分別一事也、師義未聞之、可尋之、

師云、

尋云、抑複疎三諦ノ文点何様ニ可讀哉、

師云、付之重々讀有之、異義不同也云々、或云ウツカスト讀也

意云、仮ヲウツカシテ空中ヲ置ク、空ヲウツカシテ仮中ヲ置ク、中ヲウツカシテ空仮ヲ置クト云義也云々、故三諦各具三諦成九ヶニヲ也

或云、スカスト讀也、其義如前ノ、仮ヲスカシテ置空中ニヲ等也

或云、本ニカヘルト讀也、初ノ円融ノ三諦ノ本ニカヘテ尺スト云事也、此ハ重尺ノ

義ト同事也

或云、ウトキヲツクト讀也、ム云、意云、円融ノ三諦ハ委細ニ不ルハ尺九ケヲウトキ義也、仍テ還テ円融ノ三諦ニ委細ニ尺スル義也、是モ雖語ハ異也ト其義ハ

只同重尺ノ義ニ也、師義云、當体ニ余ノニ二諦ヲカサヌルヲ疎ヲツクト云也云々、ム云、其義如次ノ義ノ

或云、ワカツト讀也、意云、一諦ヲワカテ余ノニ二諦ヲ具スト云事也云々

西谷林泉房ノ本義ニハ重尺ノ義也、仍テ複疎ニ二字俱ニカサヌト可讀也云々、仍テ決一ノ尺ヲハ可讀複ニ疎スト三諦ニヲ也云々、所謂、円融ノ三諦ヲ重ネテ委ク尺スル義也云々、維仙モ重尺ト云々

前度止觀之時、

或云、複ト疎ニヲ讀也、意云、三諦各具ル三諦ニ之時、空ニ複ハル余ノニ二諦ニ即

複ヌル疎ニヲ義也、此之時ハ空ハ當体ニゾ非疎ニニ仮中ニ二諦ハ望ニ空ノ當体ニ疎也、仍テ

空諦ニ複カサヌル仮中ノ疎ヲ義也、余ノ二諦例ゾ爾也

或云、複ト疎ヲ可読也云々、其義同前ノ義ニ余ノ二諦ノ疎ヲ當体ノ空諦ニツク
義也、余ノ二諦亦尔也、仍与前ノ義同也

師云、恵心流ニ三觀一心ハ迹門ノ意也、一心三觀ハ本門ノ意也云々、是ハ慈覺大師
入唐之時、值テ惠遠和尚ニ相伝シ給ヘル徵也、爾者、旦那流ニモ不可非之歟云々
付之尋云、是ハ惠遠和尚相伝ノ義徵也、慈覺ノ己証ノ御義モ此徵歟、
將存別義ヲ給歟、如何

師云、

慈覺大師之己心中記中

師云、三昧阿闍梨良祐ト云人、先唐院之虫癢ノ時、慈覺大師ノ己心中記ヲ見出ソ
是生前之幸也ト云テ隨喜感嘆流涙披見ス、其後帰坊中之時、隨喜感
悅之余リニ御経蔵ノ戸ヲ忘却ノ不ノ閉還ケリト云々、良祐者、從慈覺八代ノ
御弟子也ト云々、其後慈覺ノ己心中記ハ世間ニ披露シケリト云々
ム云、是未師伝、仍以後之時、可相談之、不宜事□也

付一心三觀ニ觀心枢檢三諦下中 是未伝受

師云、此書ハ快豪從リ実深相伝スルヒサ門堂相承ノ秘書ノ隨一也云々

一心三觀ノ血脉相承之法門書之ニ云々、快豪ハ血脉相承ハ值テ公海已講ニ相伝之
又求道聖人ニモ相伝之、又快仙ニモ相伝ト之ニ云々、實深ニハ此ノ書ヲ相伝スル許也、法門口
伝等ヲ非相承スルニハ也云々、可思之、公海ハ值テ赤井ノ法印慈胤ト云人ニ相承スト云々
赤井法印ト者、恵心・旦那兩流兼学スル人也、雖尔ト本トハ旦那流ノ人也云々

可尋之、公海ハ明禪ノ御弟子也、仍テ經海ニハ同法也、雖爾一ト後ニハ經海ニモ習物一
ケリト云々

又云、実深宰相僧都ト者、經海ノ弟子也、所謂、維仙・快仙・實深トテ三人也、其中ニ
實深ハ俗諦ノ執事也、サホトノ非學匠ニハケリト云々、經海臨終之時、写瓶觀隆ニ
被付一セ之時、觀隆ハ末學匠ニ之間、真諦ニハ維仙ニ扶佐シム之ヲ、俗諦ヲハ實深ニ被申付一、仍テ
實深ハ經海ト觀隆トノ二代ノ執事也、而觀隆無メ何程死去セラル、仍テ其時相伝ノ秘書
等實深竊ニヌスミ取ルト云々、但ヌステ書ク之歟、又直ニ彼ノ書□取ハ歟、委キ

子細ハ可尋之、但今ノ風聞ハ直ニ彼ノ秘書等ハヌスミ取ト云々、仍テ本所ニハ無之歟ト、

云々、可尋之、此秘書ヲ從リ實深・快豪助ノ僧都ト云人相伝ノ関東ニ下

向ス此ノ書ヲ有ル人非分ニ有テ子細ニ感得ス之、祐師又対ソ彼人ニ感得之給也

快豪ハヒサ門堂ノ供僧也、實深ノ弟子也云々、可尋之、

仍テ一心三觀ノ血脉相承ハ旦那流ニハ不ト相承之云事大ナル僻事也、不存知一人
如此云也、此口伝相承ハ尚從ヨリモ恵心流ノ相承ニ委細ニソ甚深ノ事也ト云々

又師云、快豪カ云、維仙ハ既ニ被付觀隆ノ扶佐ニヒサ門堂ノ口伝相承ノ秘書等一

分モ不可見之残ス既ニ付處ノ觀隆ニ被付扶佐ニ何ソ口伝相承ノ法門一トゾモ残サン

之哉云々、仍テ彼ノヒサ門堂ノ秘書共ヲ不ス残ニ存知スル人ハ維仙也云々、

ム云、世間ノ人維仙ハ不ト相承大事ヲハ云事ハ此等ノ子細ヲ不存知一人也、但雖口伝
相承・書籍ヲ未書き取給、故ニ書籍ヲ不ゾ持田舎下向セラル、故無相伝ト云事ト覺
也、仍僻事也云々、師義ノ徵如此也、能々可尋之、

尋云、當時觀隆之後ハヒサ門堂ノ適家誰人哉、

師云、當時ハ順海ト云人歟、可尋之、不分明也云々

師云、雖惠心流人也ト心觀ハ值テ信承法印ニ檀那流ノ一心三觀血脉相承スト云々

淨明法印ハ旦那流ノ一心三觀等ハ不被相承^一也云々、信承法印ハ安居院人也、所謂、聖覺ノ弟子也、雖爾^一ト又惠光流ヲモ兼学セラル也、惠光流ハ宝地

房ノ証真ノ弟子ニ宗源ト云人ノ弟子也、血脉可見之、仍テ信承法印ハ檀那八代ト

云々、明禪ト同時ノ人也、明禪ヨリモ後マテ被存^一ケリト云々、信承法印ノ題者ノ時精ニ云、一心三觀ノ血脉相承ノ法門未出口外^一ヲ云々、ム云、旦那流ニハ一心三觀血脉相承等深ク秘之^一、故人不知之^一、故旦那流ニハ不ト相承之^一云歟ト覺也

ム云、此書隨分秘藏ト云々、是未面受口決^一只書取許也、可口伝之^一、不宜

事共有之^一

ム云、尋云、一心三觀血脉具疏ノ中ニ天台大師玄旨記^一ト者、付之異

名有之^一哉、師云、一言記ト云々、或云、頓旨記ト云々、是惣ソ今ノ一言

記ノ事也、如來ノ玄旨^{カスカナルムネ}ヲ記スル故ニ名ク玄旨記^一トモ、又頓旨記云モ如來ノ頓旨^ヲ

記スル義也、一言記ト云モ如來ノ玄旨ヲ一言ニ宣タル書ナル故ニ也云々

抑對テ一言ニ恵心流ニハ約ソ一言所伝之法門ニ相承ス之^一、故伝於一言ト者、一心ノ

一言ト云ヒ、或云、境智不二ノ一心是^ヲ名ト一言ト云々、今旦那流ニハ一言記ト云々、所謂、

記録セル彼ノ一言ノ法門^一ヲ書ノ名也、故名ル一言記^一ト也、如來以此一言記^一ヲ付属ソ

五百羅漢ニ令守護之^一、仍テ石塔ニ案ソノ之^一守護ス之^一、此法開悟ノ人ニ可ト相伝之^一ヲ

云々、仍テ南岳大師開悟之時五百羅漢授ク是ノ書ノ於南岳ニ々々又天台大蘇

道場開悟之時授之^一云々、師資相承ノ道遂和尚授伝教ニ給ヘリ、此一言記^ヲ

旦那流ノ方ヘ相承ト之^一云々、恵心流方ヘハ其法門許ヲ相承ソ彼ノ書ヲハ不相承也

故一言記ト云事ヲハ彼流ニハ不知^一也云々、仍テ天台モ付之^一記之^一、章安乃至慈恵大師旦那等モ記之^一給等也云々、能々可習之^一事也云々、大概許依師說^一ニ

注之耳

〔平成八年正月初觀音日稿了〕